

公益社団法人

日本造園学会関東支部

第19回学生デザインワークショップ

SUMMER

STUDIO 2024

REPORT

2024 8/31-9/15

街と里が織りなす足利の未来像

開催概要

開催趣旨

街と里が織りなす足利の未来像

関東平野が山地に切り替わる場所に位置し、足利銘仙などで知られる足利市。足利学校をはじめとした歴史的遺構や街並みが市内に点在しますが、対照的に市域北側の谷戸沿いには水田などによる里山の風景が広がり、街と里それぞれに豊かな風景が育まれています。

市街地周辺は、明治時代に最盛期を迎えた織物・染色業を中心に産業が拡大し、都心との繋がりにより経済的・文化的に大きな発展をとげました。現在では、東京まで電車で1時間半の距離感と里山などの豊かな自然環境を活かし、移住者・2拠点居住者を積極的に迎え入れています。

一方で渡良瀬川の治水工事や、かつての栄華を誇った花街の区画整理事業によって街の様相は大きく刷新されることが予想されます。さらに、里山地域では離農者が増加し、多くの農地が太陽光パネルに置き換わっていく現状があります。

街・里それぞれが個別に風景や営みを継続することが難しくなった近年、足利市ではワイナリーなどのように街と里を横断する新たな産業が目立っており、また、東京都墨田区と連携した生ごみコンポストの取り組みなど、地域横断的な活動が精力的に行われています。

そこで2024年のサマースタジオでは、大きな風景の転換期を迎える足利市を舞台に、街・里が相互に織りなし、これからの暮らしを支える好循環な風景「郊外2.0」を描く仕組みや場のデザインを提案します。

デザイン対象地は、「駅前市街地」と「里山」の2つのエリアを設定し、どちらかを選択してもらいますが、両エリアが相互関係によって成立する提案を目指してください。

スケジュール

8/31(土) キックオフミーティング @ 日建設計竹橋オフィス

○ガイダンス

課題説明、参加者自己紹介、スケジュール説明

○足利市と提案敷地に関する情報提供

柏瀬 誠

足利市 生活環境部環境政策課

「足利市について」

西山 未真

宇都宮大学農学部 教授

「現代の“都鄙共存圏”を考える -足利市をフィールドとして-

○ゲストより話題提供

辻 喜彦

アトリエT-Plus 建築・地域計画工房 代表

「地域との向きあい方 -地域を元気にするデザインのチカラ-

川島 範久

明治大学准教授 / 川島範久建築設計事務所代表

「自然とつながる建築・都市をめざして」

藤木 庄五郎

バイオーム

「市民協働で取り組む生物多様性保全の最前線」

向山 雅之

竹中工務店

「『人と自然をつなぐ』を考える」

○トークセッション

ゲスト・学生・チューターによるカジュアルなブレスト

9/1(日)~9/6(金) プレサード期間

○グループごとにワークショップに向けた準備作業

○チューターレクチャー

9/4(水)19:00~ @ZOOM

提案敷地に関する話題の提供

9/7(土)~9/15(日) ワーキング期間

○グループごとに案の検討、最終日に講評会

○コアワーキング

Day1 9/7(土) @ 足利市

サーベイ結果発表・コンセプトの方向性確認

Day2 9/8(日) @ 足利市

コンセプト・サイトプランの発表

Day3 9/14(土) @ チューター事務所

最終発表に向けたラフプランの発表

Day4 9/15(日) @ 足利市

講評会・クリティーク・懇親会

講評者：キックオフミーティングのゲスト6名

+ 木下剛 支部長

12月末

まとめ本発行

目次

● 概要

開催概要・目次 P1

● 各チーム提案

A チーム 「水に織られて、動き出す足利」 P3

B チーム 「おかえりのまちへ」 P9

C チーム 「ズレの中で暮らす」 P15

D チーム 「区画を紡ぎ、風景を編む。」 P21

E チーム 「アシカガ3Gネットワーク」 P27

F チーム 「還る里山」 P33

● ゲスト講評 P39

● 活動記録

活動写真 P45

協賛企業紹介 P51

概要

A team

B team

C team

D team

E team

F team

ゲスト講評

活動記録

協賛企業

A

水路再生
都市構造
防災
まちづくり



若林 英範
東京農業大学 大学院
造園学専攻 M1



手代木 祐可子
東京大学 大学院
社会基盤学専攻 M1



鈴木 希悠
千葉大学 大学院
環境園芸学専攻 M1



小室 虎太郎
千葉大学
園芸学部 B4



秋葉 涼
東海大学
観光学部 B4



松野 祐太
小野寺康都市設計事務所



邢 絲琦
株式会社日本設計



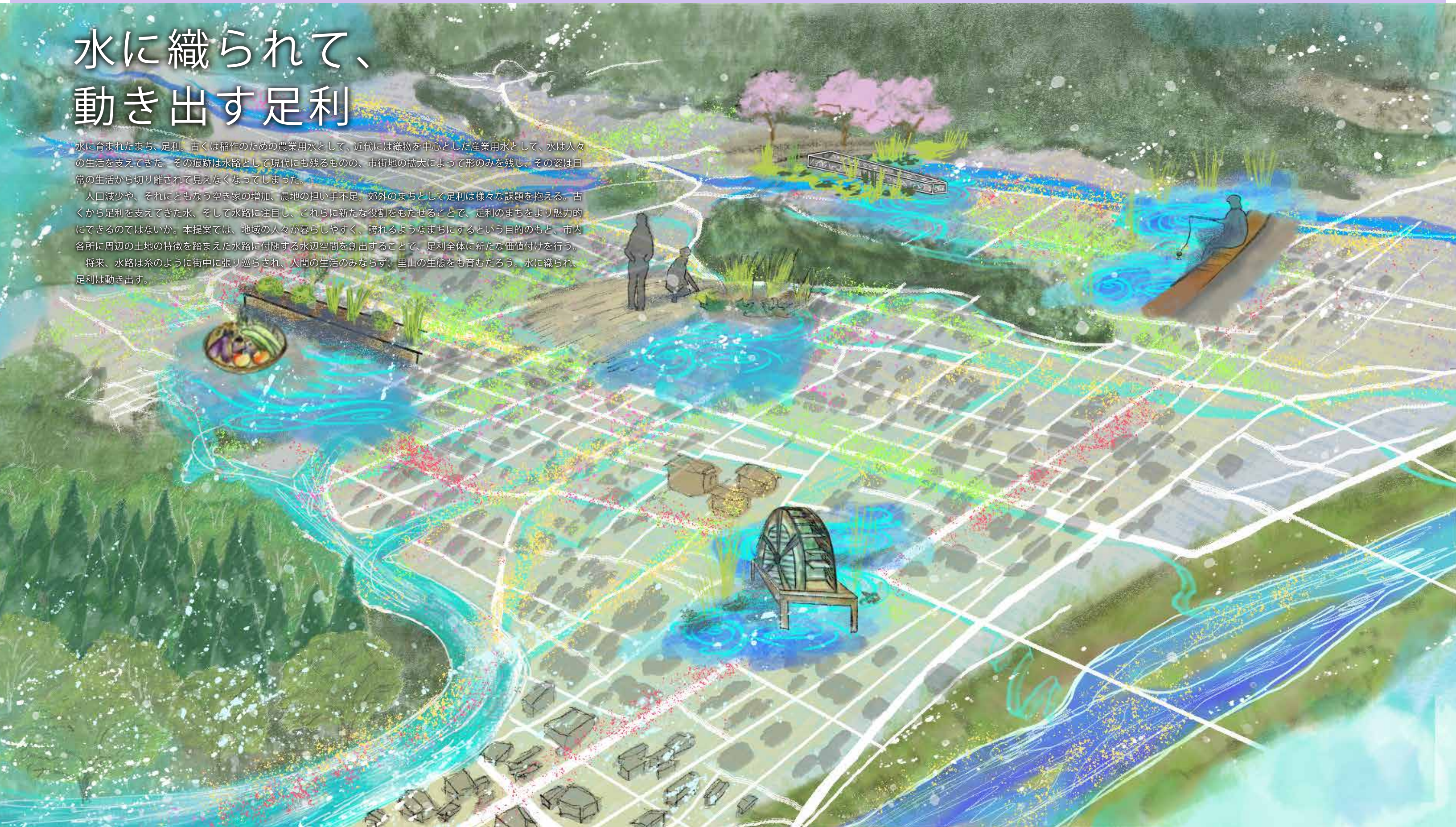
小林 祐太
plough

水に織られて、 動き出す足利

水に育まれたまち、足利。古くは稲作のための農業用水として、近代には織物を中心とした産業用水として、水は人々の生活を支えてきた。その痕跡は水路として現代にも残るものの、市街地の拡大によって形のみを残し、その姿は日常の生活から切り離されて見えなくなってしまった。

人口減少や、それともなう空き家の増加、農地の担い手不足。郊外のまちとして足利は様々な課題を抱える。古くから足利を支えてきた水、そして水路に注目し、これらに新たな役割をもたせることで、足利のまちをより魅力的にできるのではないかと。本提案では、地域の人々が暮らしやすく、誇れるようなまちにするという目的のもと、市内各所に周辺の土地の特徴を踏まえた水路に付随する水辺空間を創出することで、足利全体に新たな価値付けを行う。

将来、水路は糸のように街中に張り巡らされ、人間の生活のみならず、里山の生態をも育むだろう。水に織られ、足利は動き出す。



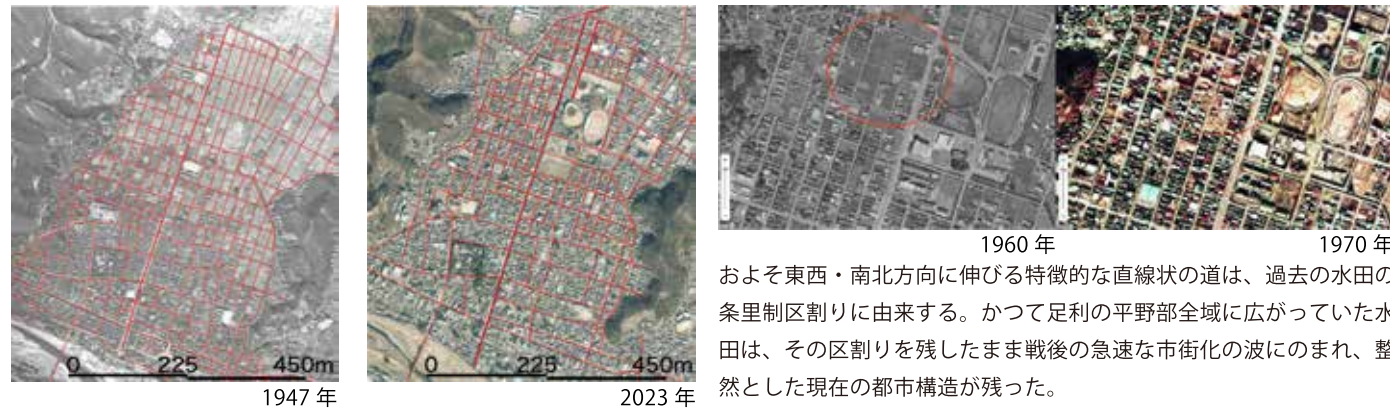
SURVY
現地調査での気づき

足利を流れる水はめっちゃキレイ！



足利は水に恵まれている。北からは名草川、田島川、袋川が流れ、南部には渡良瀬川が横断する。特に里山地域の水は透明度が高くとても美しい。

都市構造の変遷



1960年 1970年
およそ東西・南北方向に伸びる特徴的な直線状の道は、過去の水田の条里制区割りに由来する。かつて足利の平野部全域に広がっていた水田は、その区割りを残したまま戦後の急速な市街化の波にのまれ、整然とした現在の都市構造が残った。

土地利用の変遷



1930年代、渡良瀬川北側の平野部はそのほとんどを水田が占めていたが、現在は市街化が進み、水田が残るのは平野北部の谷津地形のある名草や田島といった場所に限定されている。

水路構造の変遷



古くから、渡良瀬川から取水した水が柳原用水によって足利の水田に届けられていた。現在は農業用水としての利用がほとんどなくなり、市街地からの排水といった限定的な役割しかもたない。

銘仙との関わり

水路は農業における利用にとどまらず、水車の動力による機織りや染色など、足利の織物産業を支えてきた。一般大衆に広まった江戸時代の足利織物はのちに足利銘仙となり、足利の主要産業の一つとなるとともに、両毛鉄道の開通のきっかけになるなど、足利自体の発展に寄与した。



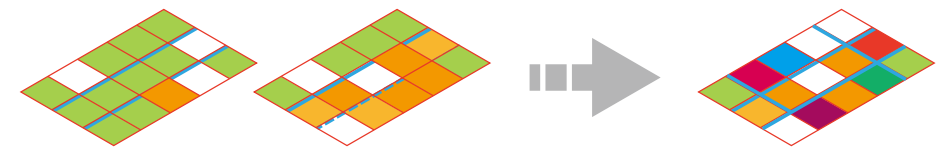
銘仙の技術は機械にも受け継がれている

現在の水との関わり



PLAN
コンセプト

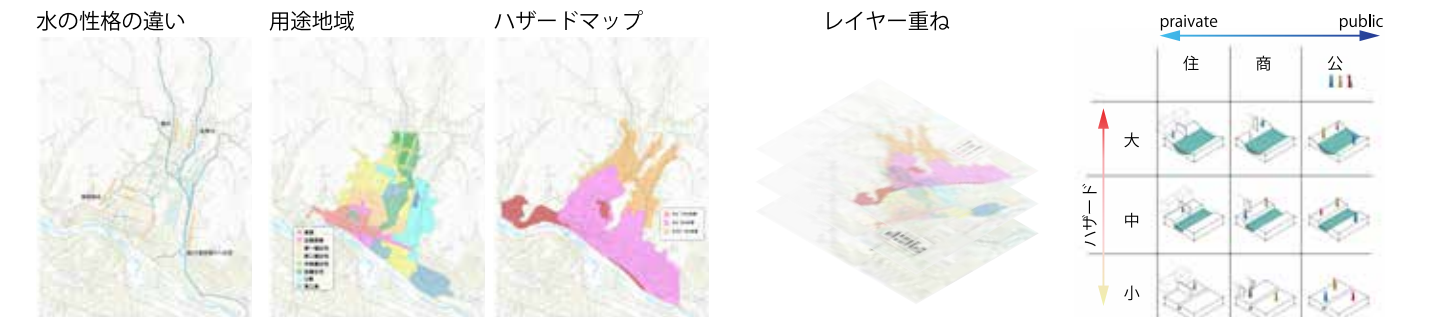
提案方針「縦系・横系で未来の足利を紡ぎ、支える」



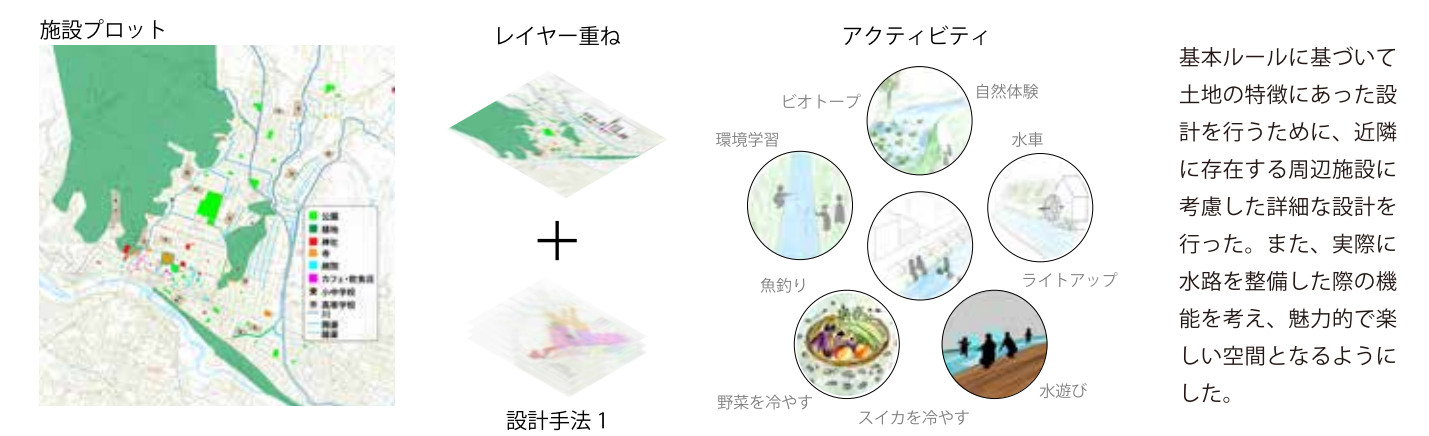
足利の都市構造と水路を「縦系」と「横系」に見立て、未来の足利を地域の人々が暮らしやすく誇れる街にするための街づくりを提案する。

設計手法 1

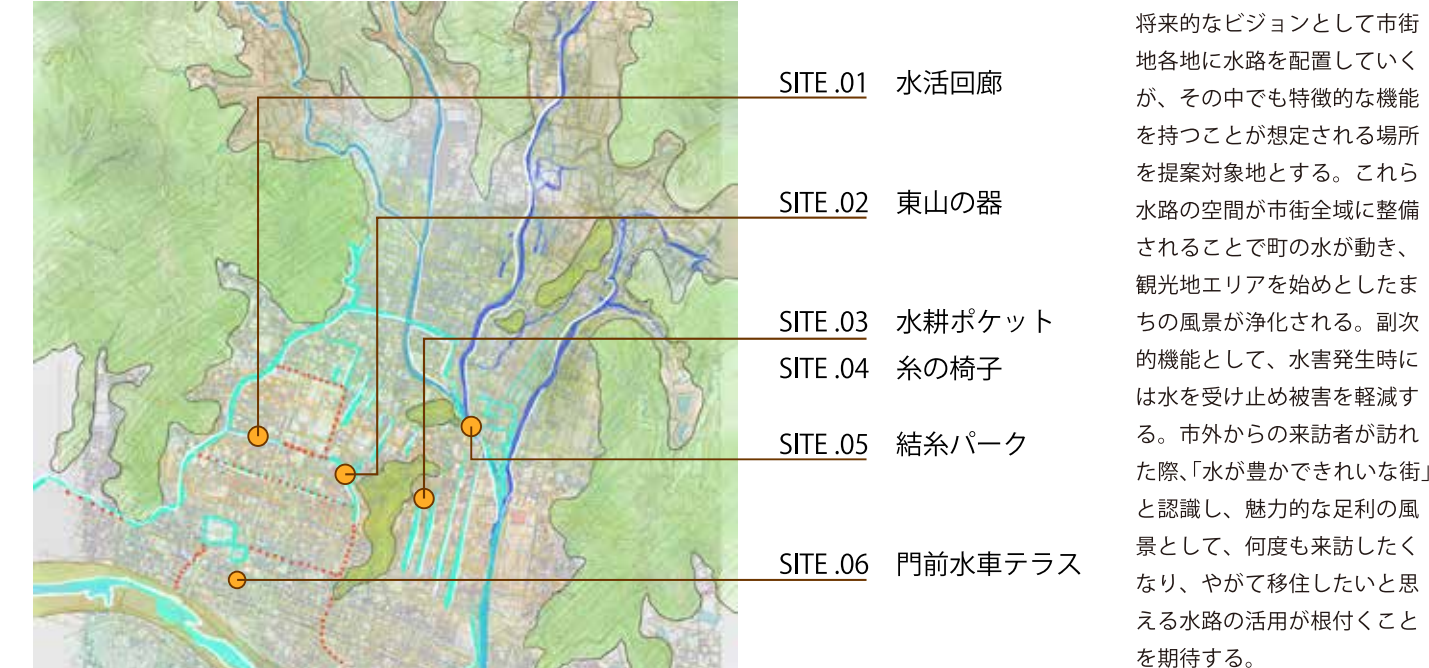
未来へつながる新たな「水」と共生する街を創り出すために、街を流れるのは主に里からの水と・渡良瀬川からの水の2つに分類できることを踏まえた上で、用途地域やハザードマップを重ねることで、土地に見合った形・活用方法のための設計ベースとなる9つの基本ルールを作成した。



設計手法 2

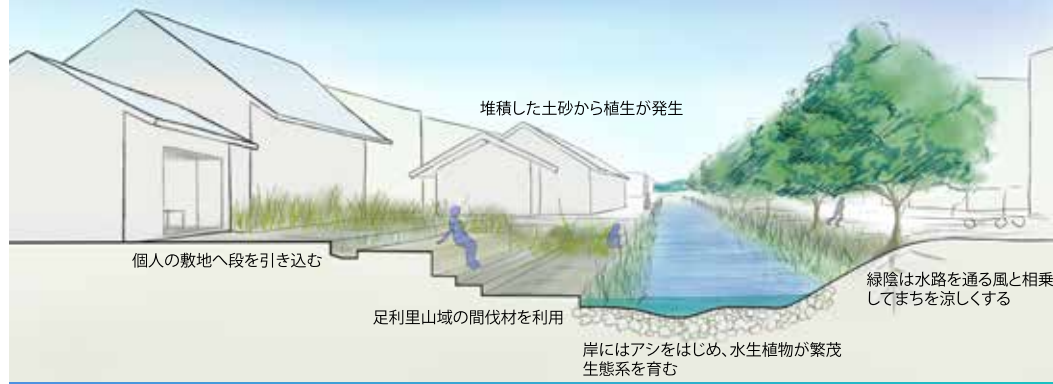


SITE MAP



Site.01 水活回廊

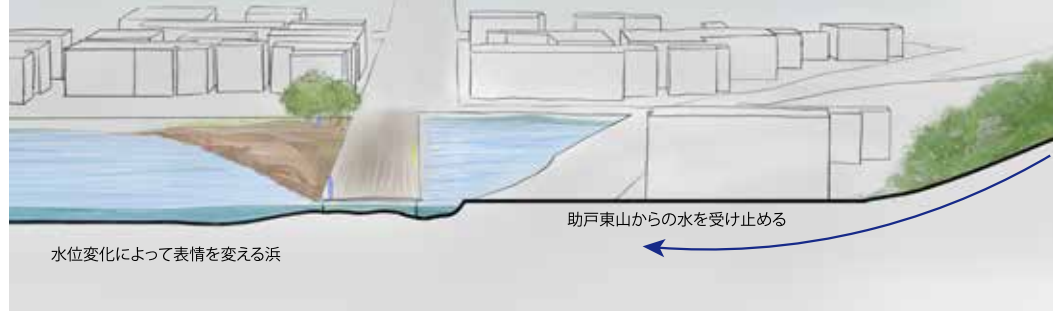
住宅敷地内からゆるい段差で水路へと空間をつなげ、人を水辺空間へ自然と引き込む



隔絶された空間となった暗渠や水路を開放し、風の通り道となって樹木が作り出す緑陰と合わせ、町を冷却する親水空間の庭が生まれる。

Site.02 東山の器

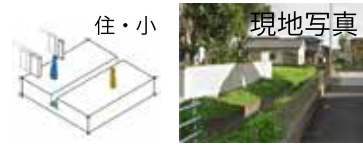
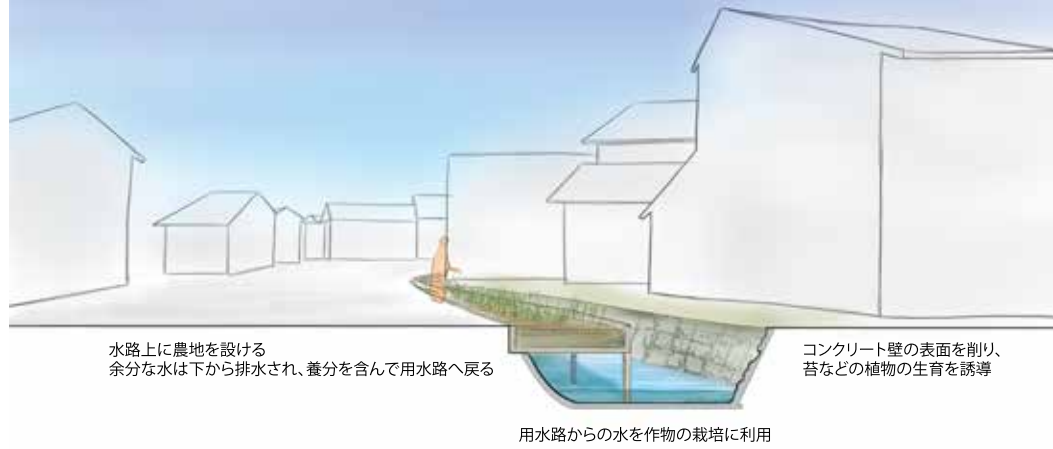
徐々に堆積する土砂は貯水池外側とのレベル差を小さくしていく



助戸東山から流れる水を受け止めるため、窪地エリアに遊水地を整備し、親水公園とする。

Site.03 水耕ポケット

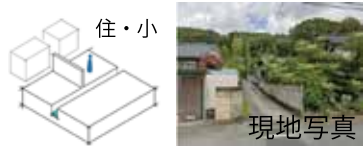
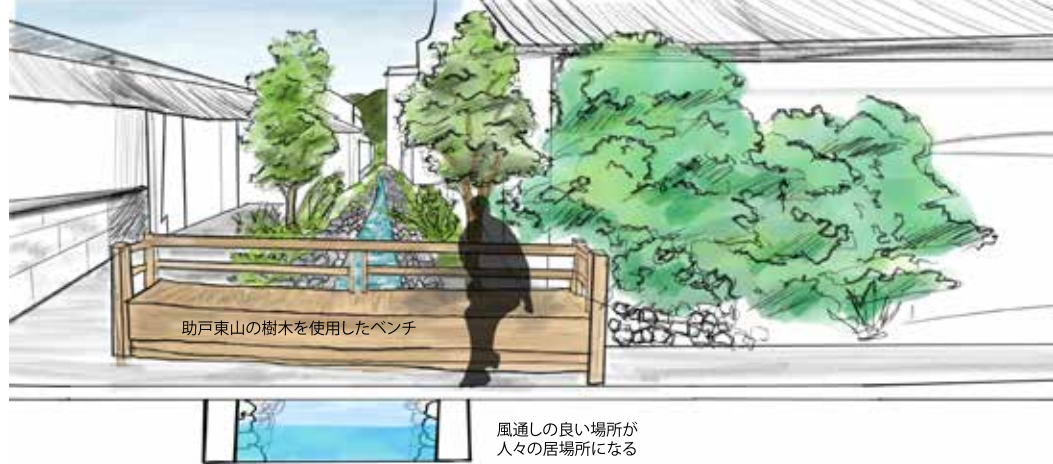
水路上に農地を設ける
余分な水は下から排水され、養分を含んで用水路へ戻る



用水路からの水を作物の育成に利用し、住宅街の中に点在する残った農地とのネットワークを形成する。

Site.04 糸の椅子

助戸東山の樹木を使用したベンチ

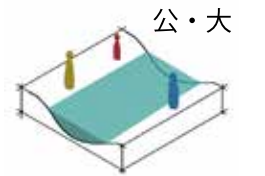


細い水路の通り道に、助戸東山で出た倒木を利用した椅子を置くなどして、近所の人々が集まるような小さく過ごしやすい空間を創出する。

Site.05 結糸パーク

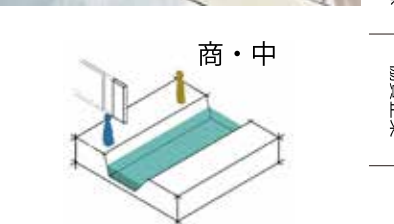
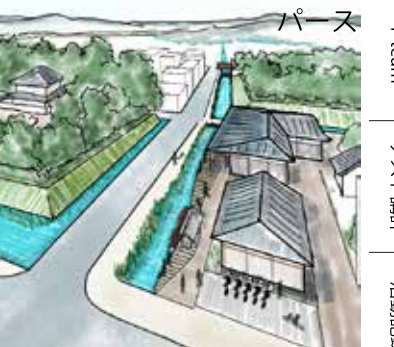
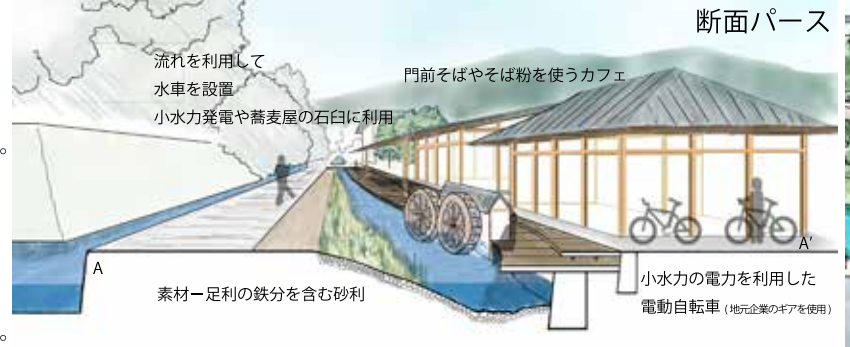


袋川、名草川により里からの生態系が運ばれ、渡良瀬川からまちを通る柳原用水の水がぶつかる、「お互いの環境の糸を結ぶ場」として生態系豊かな公園を目指す。



Site.06 門前水車テラス

足利学校前の水路を再興し、鍔阿寺や足利学校のよどんだ堀を美しい水路に戻す。その脇に再生した景観や水車を活かした足利市の観光の拠点を整備することで観光の活性化を目指す。





高塚 啓輔

千葉大学大学院
園芸学研究所 M1



茅沼 耕平

東京大学大学院
工学系研究科 M1



三堀 響介

千葉大学大学院
園芸学研究所 M1



仲山 祐未

東京農業大学
造園科学科 B4



市川 萌乃

多摩美術大学
環境デザイン学科 B3



河端 大樹

工学院大学
建築デザイン学科 B2



富士榮 宏将

フリーランス



上林 就

株式会社
上條・福島都市設計事務所



小林 裕太

plough

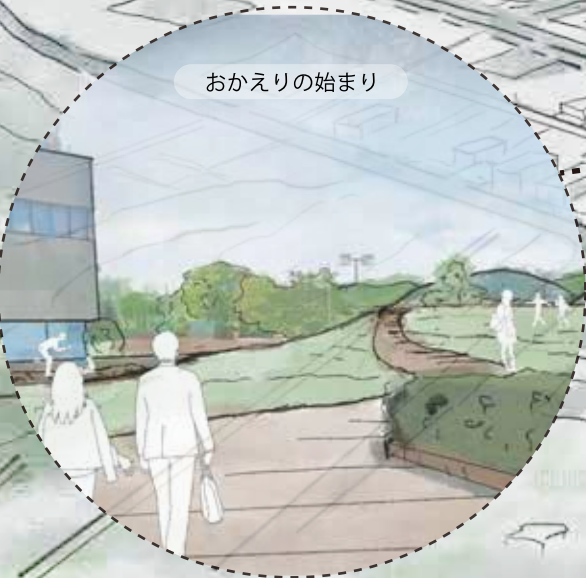
おかえりのまちへ

・提案
足利のまちに「おかえり」をさらに感じられるような景色を作る

・提案の動機
現地調査の際に、足利のまちからどこか懐かしいような「おかえり」を感じた
道路整備により変化する足利の風景の中で、この魅力を存続させるためには、
「おかえり」が様々な場所で感じられることが重要だと考えた



マルシェの風景



おかえりの始まり

中央通り沿いの空き地

中橋広場

足利市駅前

中央広場

美術館前

中橋の入り口

中橋の上からの風景

まちへの入口

アートギャラリー展示

BACKGROUND

初めに感じた、足利の「おかえり」の風景

足利市駅から町へ向かうと
三連アーチが個性的な中橋がお出迎え

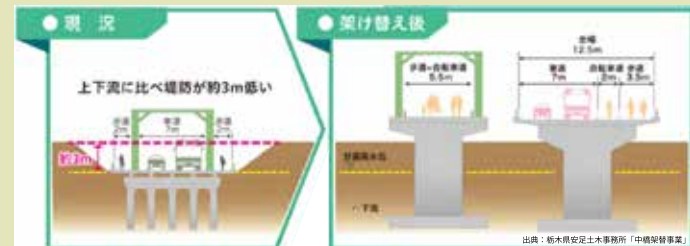


山と川に囲まれていて
落ち着くなあ

昔の面影を残す
市街地がおもしろい

しかし今後、そうした風景は失われるかもしれない

課題① 中橋架け替え事業



▷ 中橋と町の接点に変化し、駅から町への連続的な風景が失われる

課題② 区画整理事業



▷ 昭和情緒あふれる現在の街並みが部分的に失われる

CONCEPT

「おかえり」の風景を残し、活かすために

「おかえり」を感じるのどのようなシーンなのか、五感ベースで分析しプロット

鐘の音、風の音、渡良瀬川の音、「ただいま」の声、挨拶運動、町内放送、チャイム、鳥の鳴き声

河川敷の光景、両毛線の車体、鑊阿寺、橋を渡るにつれて見えてくる山並み、足利学校、夕日、アッシー（路線バス）、山並み、町並みの色、看板、蛸（里山）、ドアを開ける



他

親しい人とのコミュニケーション、特定の人に会いに行く、近所を散歩する、足利銘仙、お祭り、昔からのお店と移住者が入り混じる面白さ、アートコミュニティ、織姫神社の眺めの良さ、麦料理をつまみに晩酌を楽しむ、戦前戦後くらいの歴史感

川のにおい、家の味噌汁、山のおい（里山）、うなぎ、炭のにおい

甘酒（鑊阿寺）、郷土料理、母の味、馴染みの味、地元の味、うどん

足の感覚（石畳）、温度感、湿度感（山や川が近い）、何かゲート的な境界、敷居的なものを越える、水がきれい、水が近くにあると涼しく感じる

SURVEY

「おかえり」のシーンを彩る、足利の魅力

アート



食文化



風景



歴史



PLAN

五感で感じる「おかえり」

足利の「おかえり」をこれからも残し発展させるために、足利に帰ってくる人の五感での体験をトータルでデザインする。点在する「おかえり」を感じさせる空間と空間の間に、新たな「おかえり」空間を挿入することで、より連続的に足利に帰ってきたことを体験させる町とする。



提案① 足利市駅前

もともとあった「ようこそ足利へ」の看板付近から中橋まで芝生や地被、低木等で構成した斜面にし、うどん屋さん近くには外でつるげるデッキテラスを整備した。看板を見て通り過ぎると、近くには子供たちが斜面で遊び、遠くには山並みや愛着のある中橋が見える。すぐ側にはうどんを食べている様子やそのにおいもすることで、足利に戻ってきた、おかえりの風景が始まる。

- ・平面図
 - ①「ようこそ足利へ」の看板
 - ②「斜面」の整備
芝生や地被、低木で構成
 - ③うどん屋さん前に
デッキテラスの整備



・設計ダイアグラム

- ① 造成による斜面整備
 - ② 植栽
 - ③ デッキテラス
- まちへの玄関口として、久しぶりに帰ってきた人が駅から歩いてきて「足利」に戻ってきた感覚を強く感じることを期待する。



・足利市駅前から



・中橋からの原風景



中橋からは遠くの山並みに囲われながら、中橋を通ることで玄関に入っていくようでもあり、駅から中橋、まちへとその連続性を感じる。中橋架け替え事業で、二車線になった橋の上では視覚だけでなく、川の流れる音や流れる風を受けながら、「おかえり」を感じて足利市へと入っていく。

・中橋からの街並みを望む



「おかえり」を感じる空間提案について

■概要

五感をベースに足利市駅から中橋、中橋通りさらには中央通りを中心にまちに散らばる「おかえり」の感覚を強める空間提案をする。その際、駅から中橋、まちへと続くシークエンス大切に、そこを軸に空間の提案を考えた。

■シークエンス

「足利市駅前」→「中橋」→「中橋通り」→「中央通り」



「五感のアイコン」



提案③ 中央通り沿い

中橋通りと中橋通りの交差点を人々を迎え入れ、中央通りの入口となるような広場を設ける。中央通り沿いの空き店舗や駐車場、空地を有効に活用する。空地にはキッチンカーを誘致したり、里山の特産品等を活用したマルシェを展開する。さらに店舗をリノベーションして空き地と一体となって中央通り沿いを整備する。食べたり、触れたりすることで里山と結びつき様々な用途で「おかえり」を感じられる場所を目指す。

・平面図

- ① 中央広場
交差点の空き地を芝生にして活用する。
- ② 中央通り沿い
空き地や空き店舗駐車場や通りを一体的に整備した。

・設計ダイアグラム

- ① 交差点の空き地の整備
- ② 空き地や駐車場の整備と活用
- ③ 通りや空き店舗と合わせて一体的に整備する。



かつての歩く人、車や自転車など行き交い

賑やかな商店街として多くの人々に利用され活気づかれることを期待す



・美術館前のアートギャラリー展示

里山での豊かな自然から採れる材木を利用して、地元の人や参加者が自分たちで椅子や机、街に展示されるアート作品などを見ることで思い出が想起され愛着を高める。そうすることで、「おかえり」の感覚を強める。



・空き地を活用した里山の特産品の販売

空き地を活用したキッチンカーの誘致や里山の食べ物を販売する。市街地の中に居ながら里山の食べ物を食べられることで里山との繋がりをを感じる。さらには材木等を活用したフォニチャーを配置し、活用すること用店街に賑わいに貢献することを期待する。

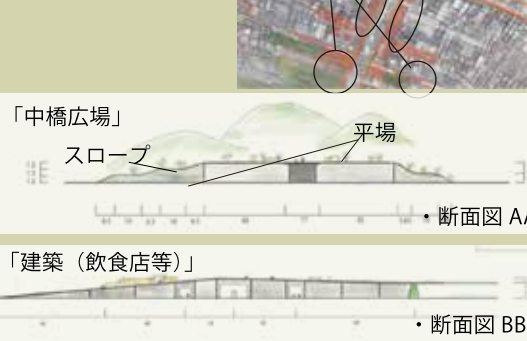


提案② 中橋の橋詰周辺

街と中橋と渡良瀬川の自然を繋いで、足利に対する愛着を強める中橋の空間提案を目指した。中橋と街、川を繋ぐようにして「中橋広場」を設計した。

・設計ダイアグラム

- ① 段上の平場とまちと中橋、川を繋ぐ
芝生のスロープ
- ② 通りに対して
交互に建築を配置した。



グルメを堪能しその匂いやその風景を見て「おかえり」の感覚を強める。

・平面図





#ズレ
#空地活用



桂川 大誉
東京工業大学大学院
環境・社会理工学院 M2



渡 由貴
東京大学大学院
工学系研究科 M1



蔵田 渚旺
千葉大学
園芸学研究科 M1



戸梶 工
千葉大学
園芸学部 B4



川村 真優
工学院大学
建築学部 B2



渡部 美香
株式会社 三菱地所設計



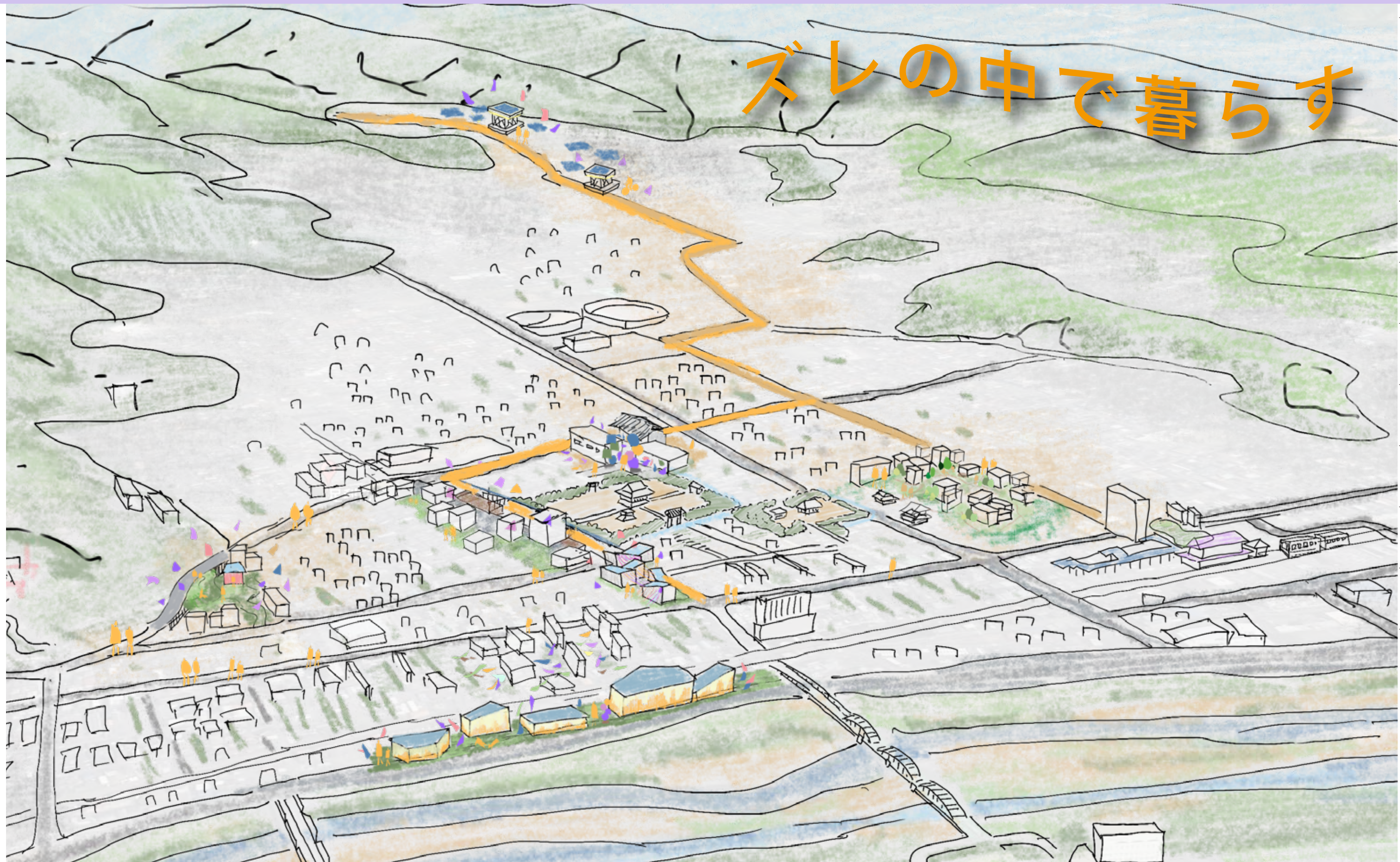
川添 浩輝
株式会社 竹中工務店



中村 覚
株式会社 スタジオ
ゲンクマガイ



岸 孝
株式会社
プレイスメディア



ズレの中で暮らす

概要

A team

B team

C team

D team

E team

F team

ゲスト講師

活動記録

協賛企業

SURVEY

・調査

足利市街地を歩くと、空き地や空き家、駐車場が散見される。また、真っ直ぐではなく少しズレている街路や、活用できそうな段差のある空間を発見した。反対に、ズレによって生まれた余白を活用している場も目にした。

足利市街地にある「ズレ」

空き地・空き家・駐車場

ズレた街区

段差

「ズレ」の活用

隙間にできたドーナツ屋



ズレた街路のプロット図



・分析・考察

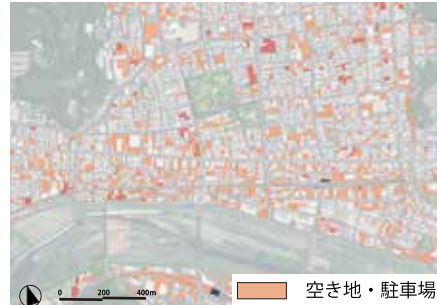
里山はソーラーパネルで地域が埋まっていっている一方、市街地は空き地や空き家が増え、埋まってほしいのに空いていく構造がある。

また、里山と市街地で軸線が別に形成され、コミュニティも別々に作られる乖離構造がある。

ソーラーパネルのプロット図



空き地・空き家・駐車場のプロット図



このような「ズレ」をポテンシャルとして捉えることができるのでは？

「ズレ」=足利らしさ

ズレの活用案イニシャルスケッチ



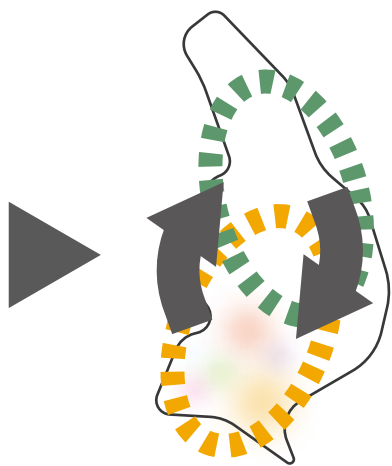
人口減少の影響もあり、市街地での空き家と里山でのソーラーパネルは増加し続けている。

CONCEPT

ズレの空間をデザインすることで、市街地の人同士の関わりしろや、里山と市街地との関わりしろを増やすことを目指す。

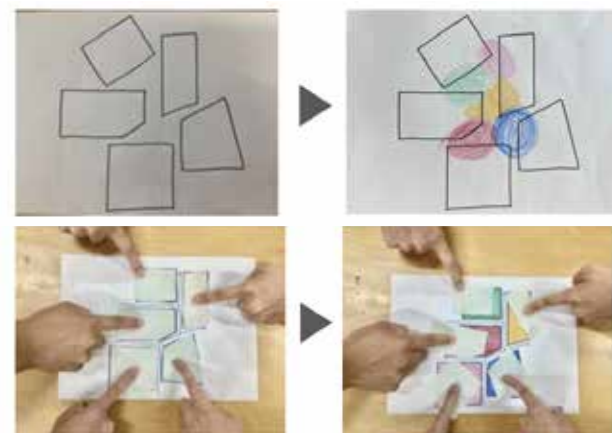


里山・市街地との関わりが希薄
市街地内で空いたスペースが増加



希薄化していた交流が強化されていき、市街地の人同士、里山と市街地の関わりが生まれる

ズレの空間のデザイン手法

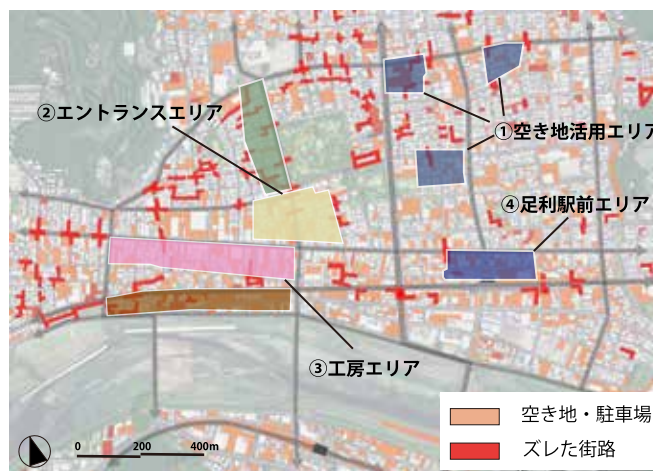
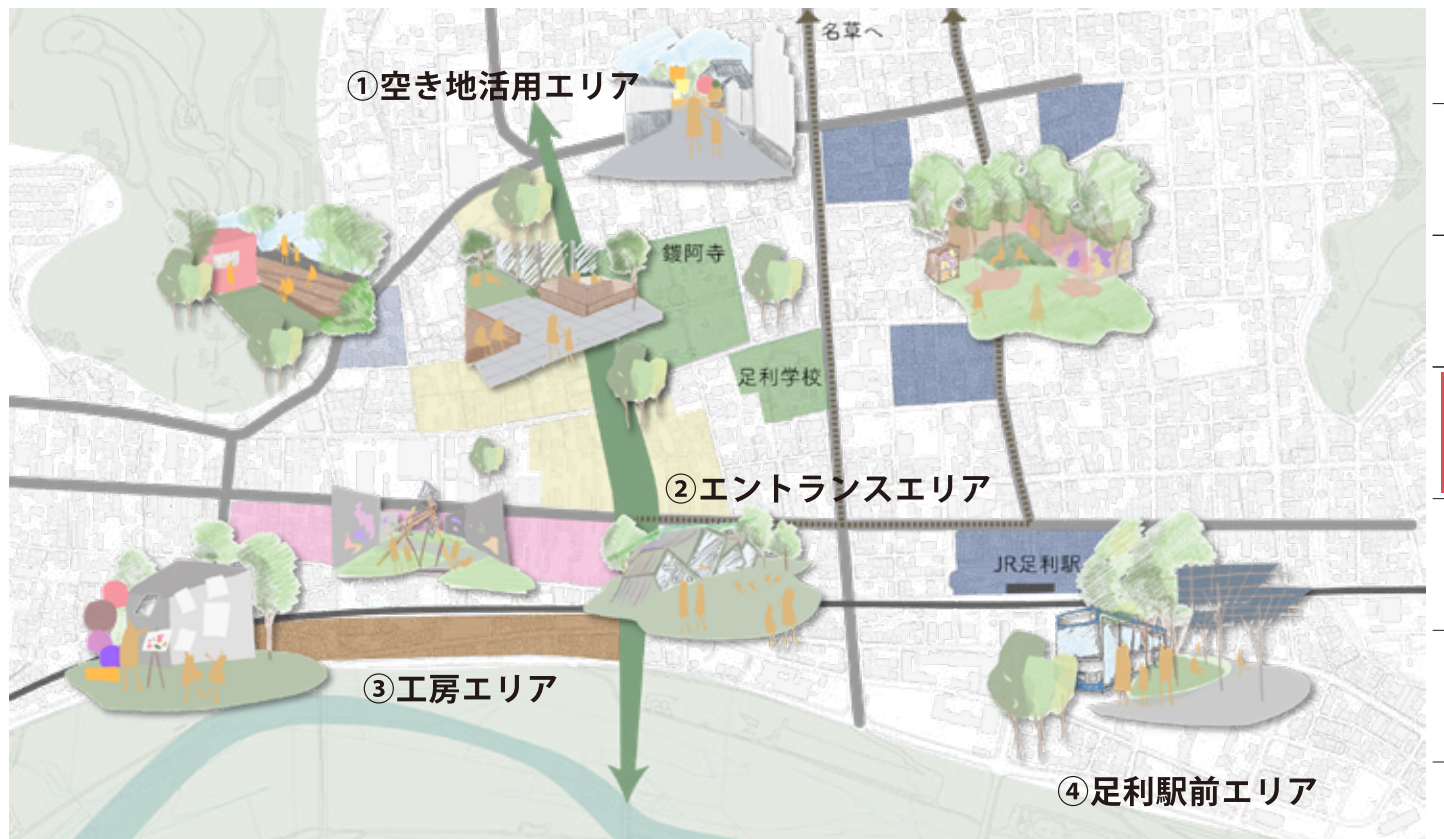


生み出したズレの空間では、里山と市街地とが補完し合える機能を入れたり、それらを繋げる交通ハブを設け、市街地の人同士の関わりしろを生み出す。また、個人から大人数の集団まで、様々な大きさのコミュニティが使える場を設け、市街地の人同士の関わりしろを生み出す。

PLAN

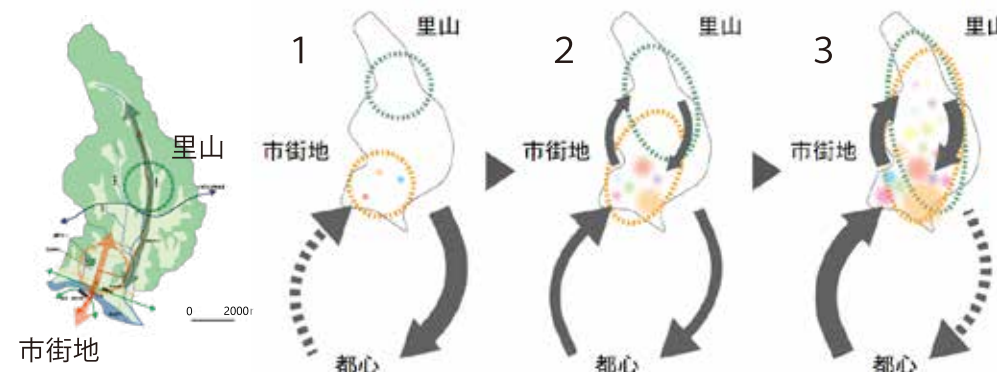
・市街地マスタープラン

調査を行った結果より、空き家・空き地・駐車場の分布と街路のズレを視覚化した。その結果を用いてデザインを行うべき場所を抽出した上で、市街地を中心としたマスタープランを作成した。これにより、町はアートとズレを核とした周遊性のあるつくりへと生まれ変わる。



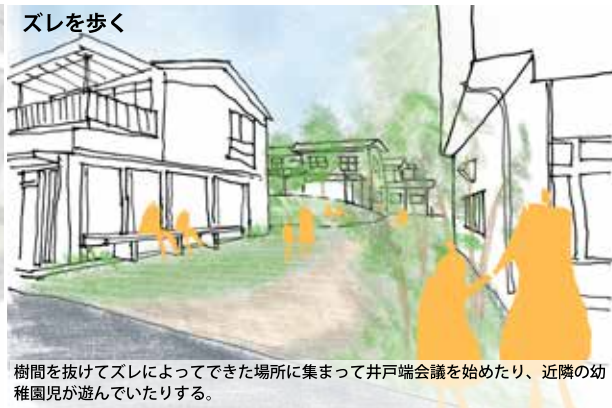
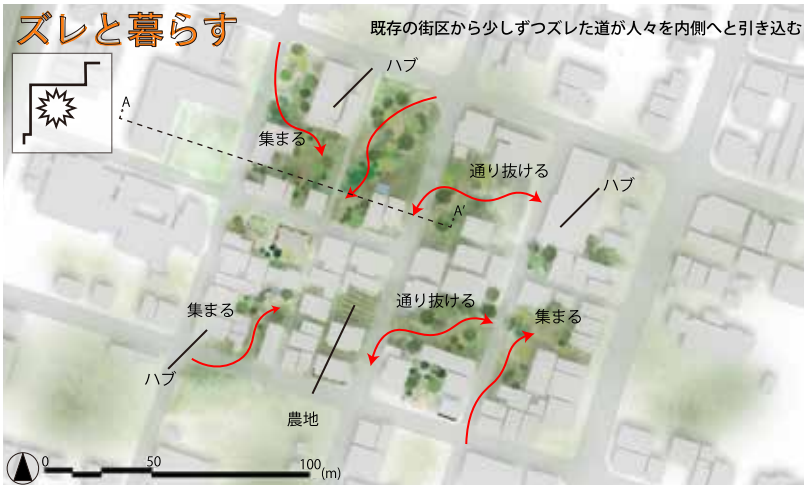
「ズレ」が点在する中から、対象地を4つ選んだ。
 ① **空き地活用エリア**：現在あるズレの空間を点在させる。
 ② **エントランスエリア**：区画整理に重なる部分で、新たなズレの空間を生み出す。
 ③ **工房エリア**：渡良瀬川の南からの人々を迎え入れるエントランスエリアからアートで繋がる場所、鉄道と堤防、新たにそびえ立つ中橋という壁の狭間にあり、今後利活用を検討していくべき場所。
 ④ **足利駅前エリア**：これらのエリアへ人々を迎え入れる。これら4つのポイントをデザインした。

・広域的な繋がり (将来プラン)



デザインにより、現在の里山と市街地の乖離した状況から
 1. ズレの空間で人々が関わり合う。
 2. 市街地と里山との関わりを生む拠点として、里山へとズレの空間が続いていく。
 3. そして、外からの人を惹きつけるような、そんな市街地里山一体のワクワクする街になっていく。

①空き地活用エリア **ズレに座る ズレに集まる ズレを彩る**



空き地や空き家を、アーティストのための空間とする。アーティストと住民が日常的に空き家や工作室を通して、交流を行い、アートがあふれる住宅街が形成される。

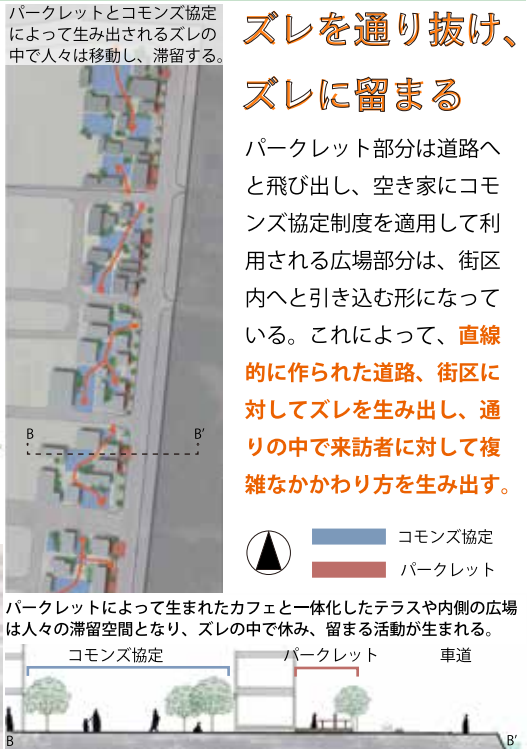


この敷地では、**平面的なズレだけでなく、道路と空き地にレベル差による、上下のズレがある。** 上下のズレを敷地境界と感じさせないために、マウンドを設けて、人々が、ずれ込んで集まれるようにする。奥まった敷地に対して道路から入るだけでなく、周囲の空き地にずれ込みながら入っていくことができる。そのズレの中に作られる、マウンド、広場ではソーラーパネルを用いた飲食スタンドが店舗、賑わいの場所となる。

②エントランスエリア **カフェで留まる 角を彩る 広域な空間**

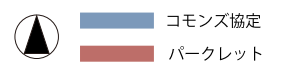


観光案内所、住民との交流・コミュニティ会館、里山への足がかりとしてのレンタサイクルリングスポットが併設されている複合施設
中橋を渡って旧市街地に入ると訪問者を出迎える。**施設の間を抜けて街へとずれ込んで、広がっていく。**



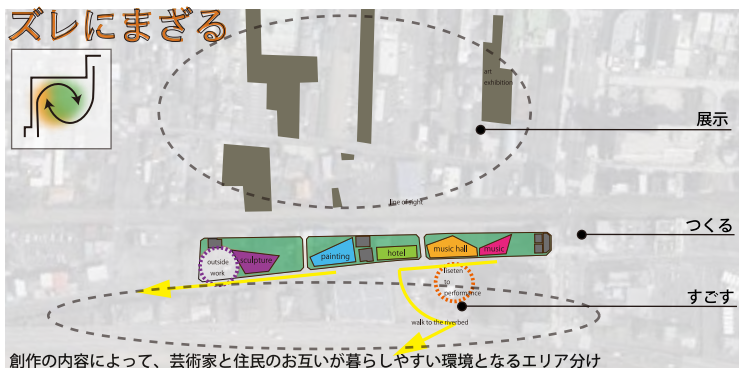
ズレを通り抜け、ズレに留まる

パークレット部分は道路へと飛び出し、空き家に commons 協定制度を適用して利用される広場部分は、街区内へと引き込み形になっている。これによって、**直線的に作られた道路、街区に対してズレを生み出し、通りの中で来訪者に対して複雑なかかり方を生み出す。**

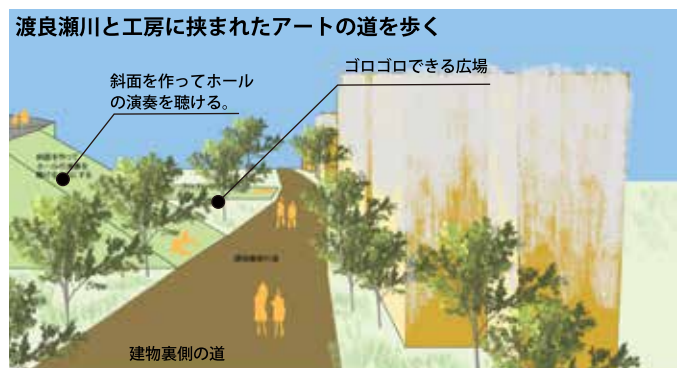
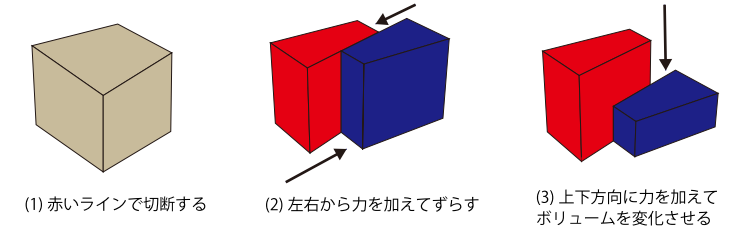


パークレットによって生まれたカフェと一体化したテラスや内側の広場は人々の滞留空間となり、ズレの中で休み、留まる活動が生まれる。

③工房エリア **街に出てくる展示 アートが生まれる 開放的な活動**

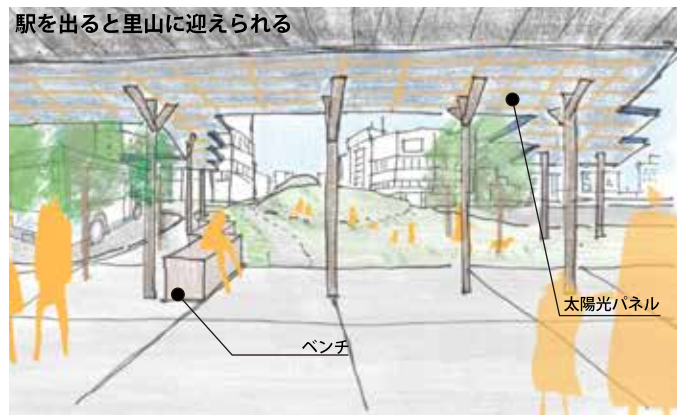
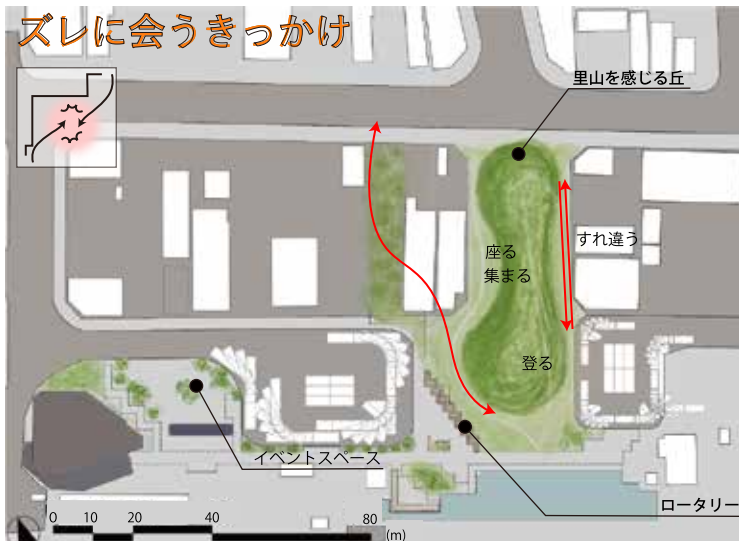


制作の内容によって、芸術家と住民のお互いが暮らしやすい環境となるエリア分け



工房からすぐ南に渡瀬瀬川があり、芸術家が工房内での制作だけでなく、フラットと河川敷に行って絵を描いたり、楽器の練習をしたりなどの活動ができる。工房の上部にある線路は、アートエリアを南北に分断しているようだが、線路を介して南北が互いを見合うような関係となり、街が一体となってアート活動を行うことが可能である。また、**工房を物理的にズレたものとする事で、線路を通す部分以外での目線のズレや高さのズレ、時間経過のズレが新しい空間やコミュニティを生む。**

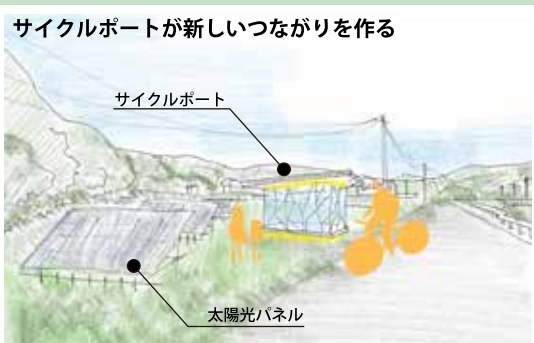
④足利駅前エリア **里山の存在を感じる 顔見知りとすれ違う 寄り道をしてしまう**



▲駅舎からロータリーの丘を見る。丘とズレたロータリーでは、人々の出会いが生まれる。
◀ロータリーの屋根は、ソーラーパネルになっている。その下には、ズレたベンチがあり、使い方の選択肢を増やしていく。

JR 足利駅は平日平均三千人以上の利用があり、足利市民も来訪者も利用することの多くなるこのエリアは、人と人、人と自然、市街地と里山がズレによって、出会うきっかけを産む空間になる。ロータリーは、東西に分けてズラし、駅前のスペースに最高 2m の丘を造成する。この丘を登った先で足利の山々が見え、里山を存在を感じさせる。現在ある塾が多く入っているビル側の丘の傾斜は緩やかになっており生徒が休憩できる場所になる。駅の出口からかかる屋根は、里山に増加しているソーラーパネルでできており、駅前エリアで足利の里山の要素を感じさせる。

⑤広域的なつながり (将来プラン) **里山の太陽光パネルと寺社をつなぐように配置する。**



ズレで人々に関わり合う。市街地と里山との関わりを生む拠点として、里山へとズレの空間が続く。

モビリティが里山と市街地をつなぐ手段となる。
・太陽光パネルを市街地へずらし、サイクルポートを設置
・自動運転を呼び出すためのポイントにもなり、デマンド交通のスポットとなる。
・工場で製作されたものや農具が置かれるなど、市民の活用とそこでの交流が生まれる。

D

区割り
共有地



区画を紡ぎ、 風景を編む。

足利の里山の風景は豊かな自然地形に沿った有機的で不整形な農地区画の集まりによって形成されていた。しかし、ライフスタイルの変化に伴い、現代的な農法に適さないこのような土地は徐々に見放されつつあり、放棄地化や太陽光パネル化といった問題が虫食いのように表出している。私たちは、足利の風景を作る一つの単位である「土地の区画」に着目し、市街地エリアと連携した共有地としての新たな土地利用を提案することで、足利の風景の再編を試みる。

背景



コンセプト

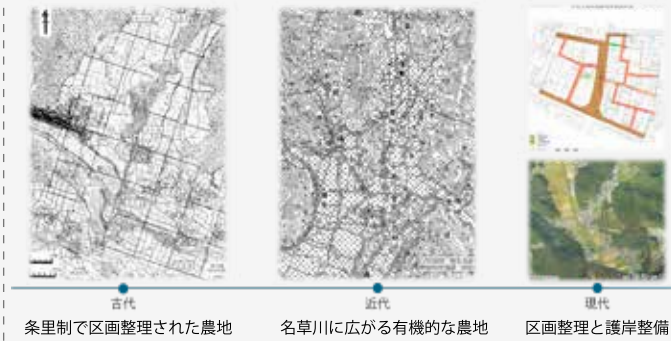


- 概要
- A team
- B team
- C team
- D team**
- E team
- F team
- ゲスト講師
- 活動記録
- 協賛企業

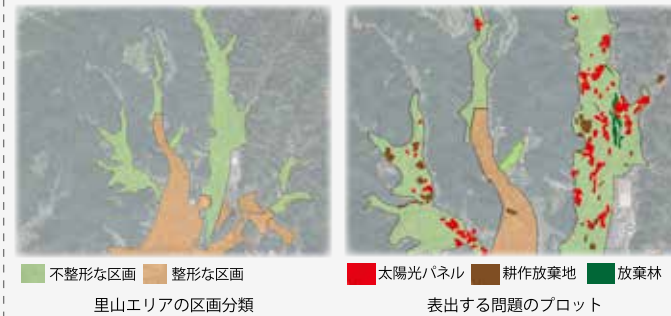
調査・分析

分析ではまず、古代から現代における足利の区割りの特徴を把握した。現市街地エリアの整形区画はかつての条里制に由来し、里山エリアに多く残る有機的な区画は自然地形に沿った伝統的な農法に適した区割りとな捉えられる。また、このようなグリッドパターンによる歴史的町並み景観と有機的なパターンによる里山景観の二面性が足利の風景の魅力と考えた。次に、里山エリアにおいて区画形状を整形と不整形の2分類で捉え、表出する課題をプロットした結果、そのほとんどが現代的な農法に適さない不整形な区画に分布していることがわかった。

足利の区割りの変遷



里山エリアの区画分析



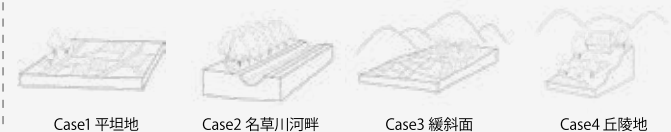
里山支援員へのヒアリング調査～里山と市街地を繋ぐ取り組み～

空き家と耕作放棄地を改装し「地域の共有地」として農業体験やクラフトなどのイベントによって市街地と里山を結ぶ活動を展開している市の里山支援員にヒアリングを行った。この拠点施設は市街地エリアに存在する行政施設のサテライトとも捉えられ、共有地は耕作放棄地や太陽光パネル化ではない、現代的土地利用のオルタナティブとして捉えられる。また、現状の農家の重荷は農地の雑草管理等であり、管理者さえいれば土地を引き渡したいと考える人も少なくないという実態が明らかになった。



ケース分類

「区画を紡ぎ 風景を編む」をコンセプトに、里山エリアにおける放棄地を起点に地域に開かれた「共有地」を作り出し、市街地エリアでのサテライト機能を配置することで市街地と里山が風景を織りなす未来像を描く。名草地域を対象に、代表的な地形区分をもつ4つのエリアを選定し提案を行った。なお、災害危険度が低く土地利用が複雑なCASE1,2は未利用地を中心に改変を最小限とした提案、災害危険度が高く土地利用が限定的なCASE3,4は自然優位の提案とした。



提案

CASE 1

里のエントランス

回遊式舞台



現況分析

CASE 2

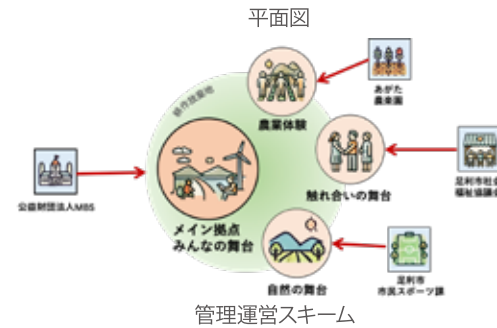
川のリビング

竹林の客間

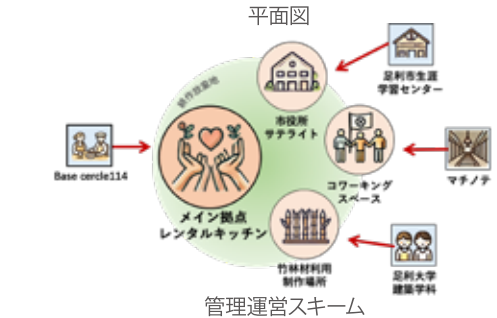


現況分析

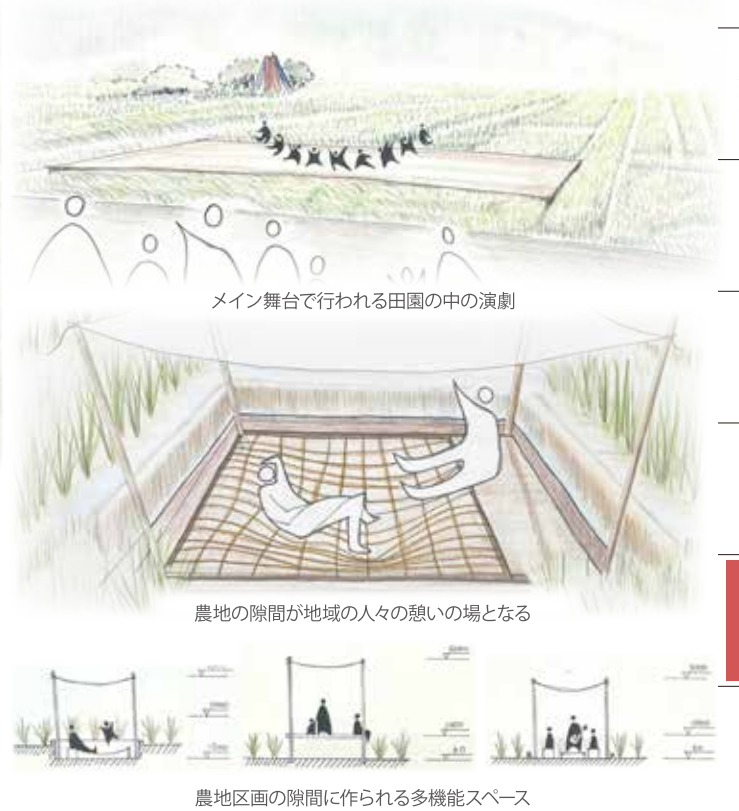
名草地域を東西に貫く高速道路南側の平地に広がる開放的な水田風景のエリアを対象地とした。市街地と里山の境にあたる地点に位置しており、エリア内にはいくつもの不耕作地が連なって存在している。市街地と里山の接続部という立地のポテンシャルを活かし、名草の里山への玄関口として人を呼び込む場を創出する、回遊式の舞台を拠点とした田



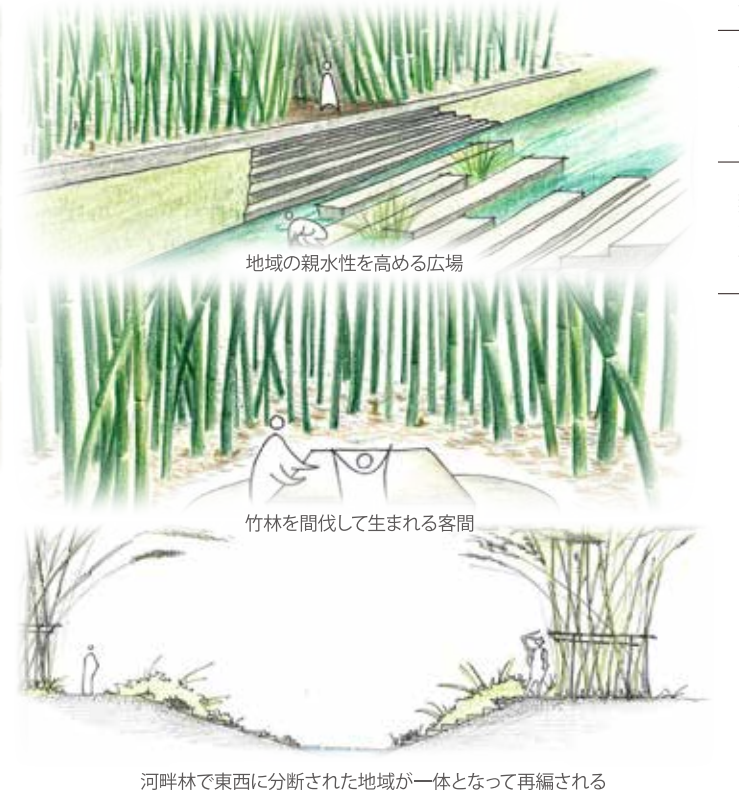
名草川中流に位置し、河畔に竹林がまとまって分布するエリアである。周辺の土地は不耕作地が多く分布し太陽光パネル化も顕著である。また河畔林は放置竹林となっており、地域を東西にする原因となっている。ワインのぶどう栽培などの取り組みや河畔に竹林が発達している特徴を活かし「食」をテーマとした竹林の中の客間を提案する。川と放置竹林によ



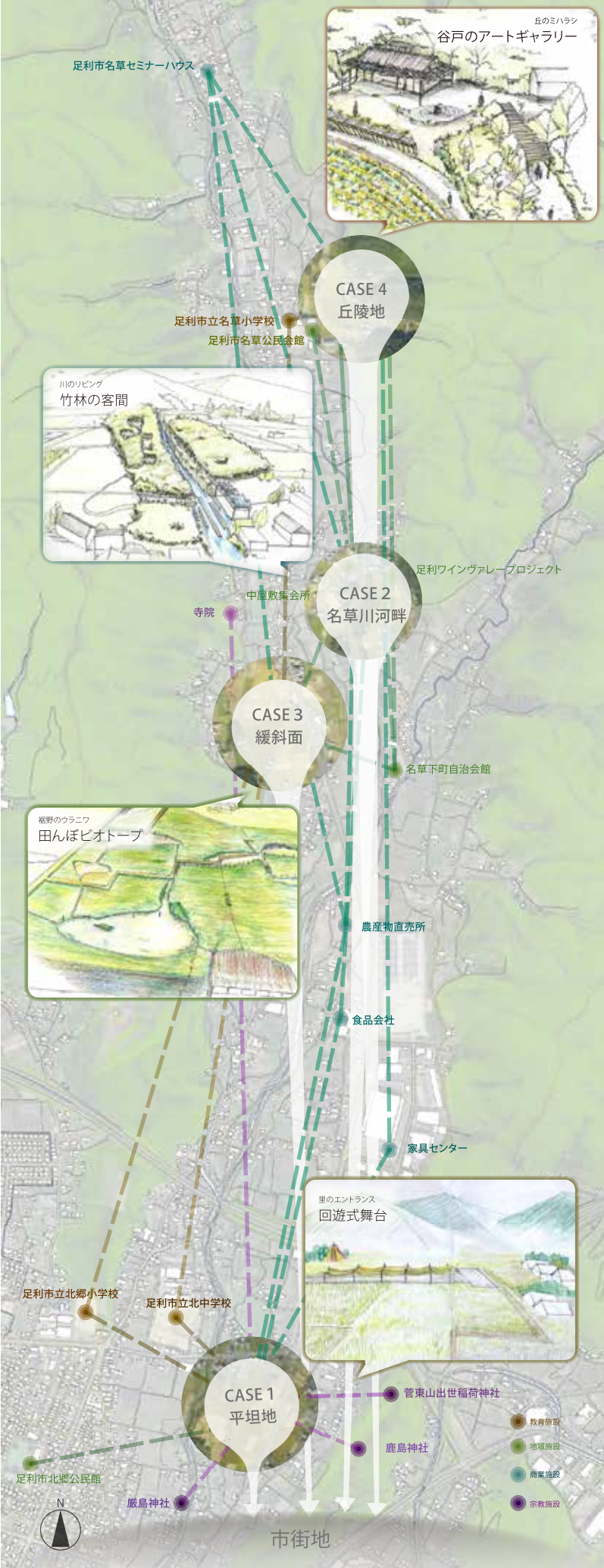
園の中のオープンスペースの提案をする。足利の映像や演劇の文化から着想を得て、多様な活動に供する大小さまざまな舞台空間を連串させていく。拠点となる舞台の周りには、不耕作地を一連につなげる回廊の滞留空間が生まれ、イベント時には田園景観をバックにした新たな観光資源の創出、日常時には足利の人々の憩いの場となるオープンスペースとして利用される。



で分けられた東西の区画対し、それぞれに分布する不耕作地を一体的に再編する。川を横断する形で結ぶ親水広場と、竹林を切り開いた回廊を整備することで、川の東西が一体となった空間を生み出す。竹林の中の滞在空間では、拠点施設として整備するレンタルキッチンと連携し、市街地の飲食店と連携した竹林のレストランといった取り組みが生まれる。



概要
A team
B team
C team
D team
E team
F team
ゲスト講師
活動記録
協賛企業



提案

CASE 3

裾野のウラニワ

田んぼビオトープ



現況分析

CASE 4

丘のミハラシ

谷戸のアートギャラリー

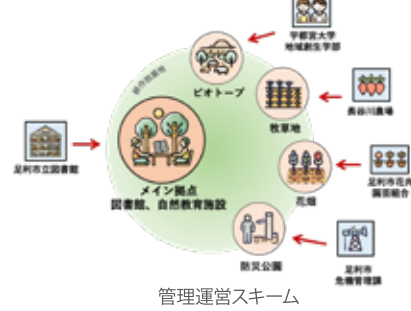


現況分析

名草の中域に多く分布する地形特性で、周辺の山々の裾野にそって緩やかな斜面地が形成されている。田んぼが帯に広がっているエリアであり、地形に沿って農業用水路がめぐらされている。土砂災害警戒区域内であるため放棄地が二次的な利用をされずにまともに残っている。現地調査で



平面図



管理運営スキーム

は放棄された田んぼが一部湿地化していることが明らかとなった。面的に残る不耕作地に対して、既存の水路から地形勾配に沿って水を引くことにより環境教育等に寄与するビオトープとして広げていく。有機的な区割りや地形を手がかりに、拠点施設と、それらを繋ぐ回廊を整備する。



面的にまとまって残った不耕作地の田んぼに一体的なビオトープが広がる

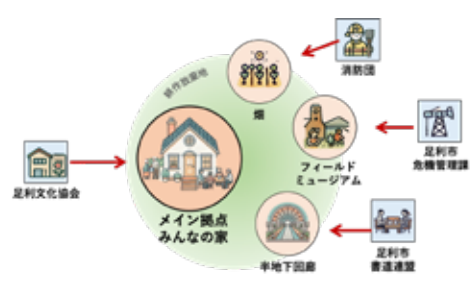


足利の原風景に目を向け、継承しつづける場となる

丘陵地エリアは地形に沿った段丘状の農地が広がっていて、高台で眺望に優れているが土砂災害リスクが高い。選定エリア内には複数の不耕作地と一軒の空き家が存在しており、周辺は小学校や公民館といった交流拠点が分布しているほか、名草地域のアートの取り組みの始点となっている。既存の空き家を活用し、足利のアートの文化と関連付けた拠点として再編

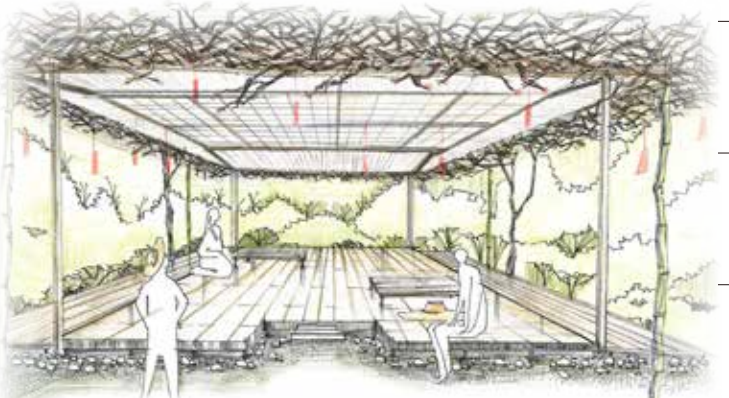


平面図



管理運営スキーム

する。隣地の山林の間伐材で空き家を修繕し、段丘状の地形を利用した半地下のギャラリー空間を作る。既存の区割りを手がかりに、地形操作や動線を検討し、エリア内にある砂防ダム前の広場を活用して人々を山へ誘導する動線も考え、アートとともに地域の防災についても考えるきっかけを生む空間とする。



空き家が修繕されアート活動の場として住民に開かれる



丘の高低差を利用したギャラリー空間災害時の避難所としても活用できる



山下 瑞貴
千葉大学
園芸学研究所 M1



石井 彦弥
千葉大学
園芸学部 B4



栲田 美希
日本大学
まちづくり工学科 B3



川田 悠太郎
東京農業大学
地域環境科学部 B3



佐野 玄隼
法政大学
デザイン工学部 B1



入江 貴道
株式会社 プレイスメディア



本田 亮吾
オンサイト計画設計事務所



井野 貴文
グラック

アシカガ3Gネットワーク

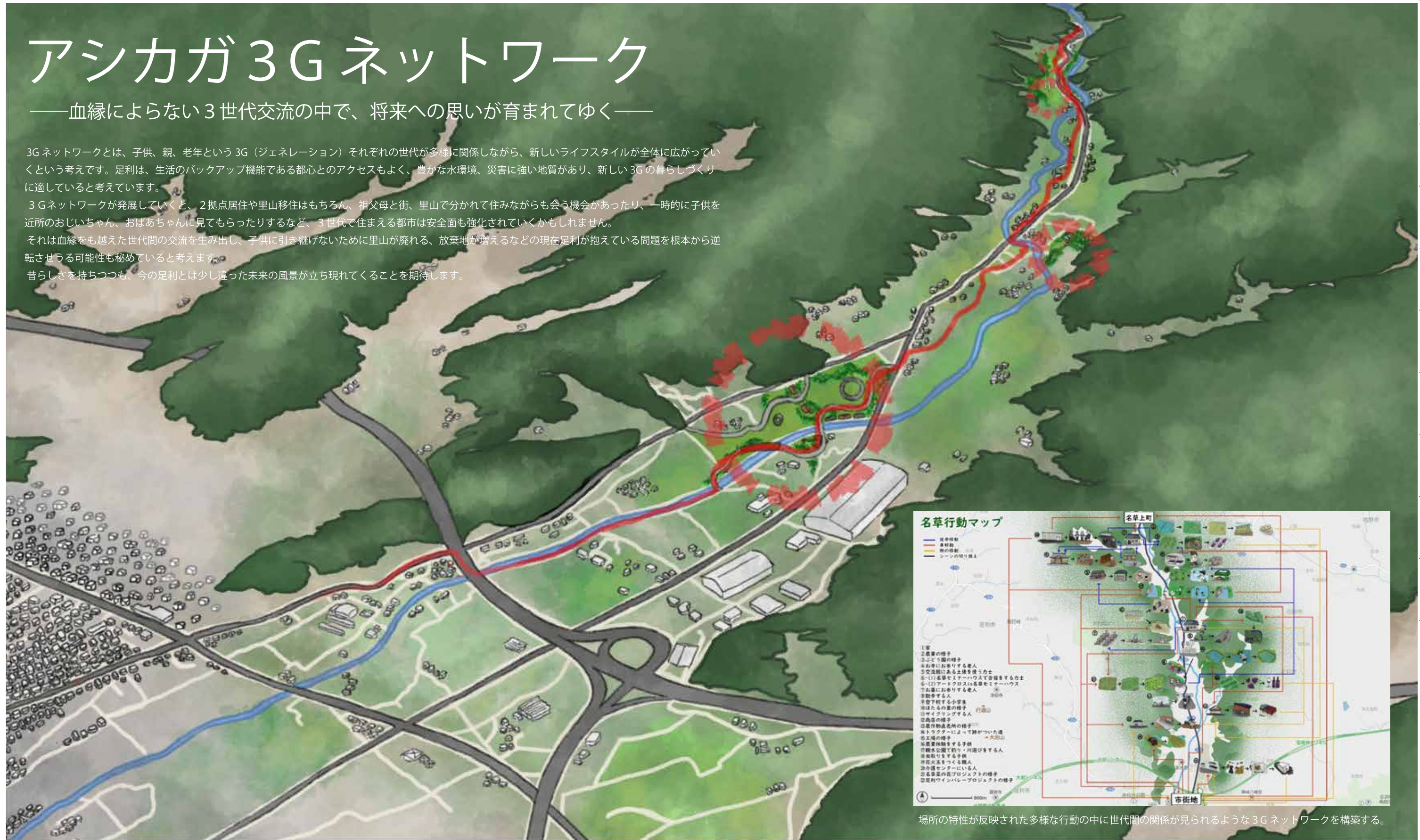
——血縁によらない3世代交流の中で、将来への思いが育まれてゆく——

3Gネットワークとは、子供、親、老年という3G（ジェネレーション）それぞれの世代が多様に関係しながら、新しいライフスタイルが全体に広がっていくという考えです。足利は、生活のバックアップ機能である都心とのアクセスもよく、豊かな水環境、災害に強い地質があり、新しい3Gの暮らしづくりに適していると考えています。

3Gネットワークが発展していくと、2拠点居住や里山移住はもちろん、祖父母と街、里山で分かれて住みながらも会う機会があったり、一時的に子供を近所のおじいちゃん、おばあちゃんに見てもらったりするなど、3世代で住める都市は安全面も強化されていくかもしれません。

それは血縁をも越えた世代間の交流を生み出し、子供に引き継げないために里山が廃れる、放棄地が増えるなどの現在足利が抱えている問題を根本から逆転させる可能性も秘めていると考えます。

昔らしさを持ちつつも、今の足利とは少し違った未来の風景が立ち現れてくることを期待します。



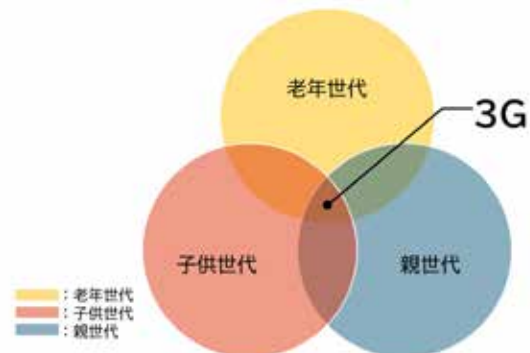
名草行動マップ

● 散歩コース
● 散歩コース
● 散歩コース
● ショッピングコース

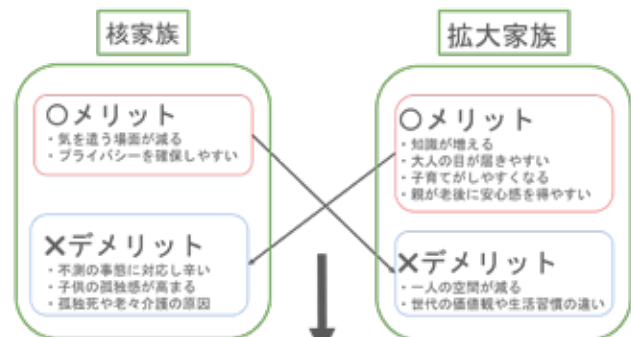
1. 家
2. 名草の様子
3. ぶどう園の様子
4. 公園の様子
5. 交流館にある本屋を借りる
6. (1)名草セミナーハウスで会議をする
7. (2)アートハウス名草セミナーハウス
8. 下お墓にお参りする老人
9. 散歩コース
10. 寺で下校する小学生
11. 散歩コース
12. 散歩コース
13. 散歩コース
14. 散歩コース
15. 散歩コース
16. 散歩コース
17. 散歩コース
18. 散歩コース
19. 散歩コース
20. 散歩コース
21. 散歩コース
22. 散歩コース
23. 散歩コース
24. 散歩コース
25. 散歩コース
26. 散歩コース
27. 散歩コース
28. 散歩コース
29. 散歩コース
30. 散歩コース
31. 散歩コース
32. 散歩コース
33. 散歩コース
34. 散歩コース
35. 散歩コース
36. 散歩コース
37. 散歩コース
38. 散歩コース
39. 散歩コース
40. 散歩コース
41. 散歩コース
42. 散歩コース
43. 散歩コース
44. 散歩コース
45. 散歩コース
46. 散歩コース
47. 散歩コース
48. 散歩コース
49. 散歩コース
50. 散歩コース
51. 散歩コース
52. 散歩コース
53. 散歩コース
54. 散歩コース
55. 散歩コース
56. 散歩コース
57. 散歩コース
58. 散歩コース
59. 散歩コース
60. 散歩コース
61. 散歩コース
62. 散歩コース
63. 散歩コース
64. 散歩コース
65. 散歩コース
66. 散歩コース
67. 散歩コース
68. 散歩コース
69. 散歩コース
70. 散歩コース
71. 散歩コース
72. 散歩コース
73. 散歩コース
74. 散歩コース
75. 散歩コース
76. 散歩コース
77. 散歩コース
78. 散歩コース
79. 散歩コース
80. 散歩コース
81. 散歩コース
82. 散歩コース
83. 散歩コース
84. 散歩コース
85. 散歩コース
86. 散歩コース
87. 散歩コース
88. 散歩コース
89. 散歩コース
90. 散歩コース
91. 散歩コース
92. 散歩コース
93. 散歩コース
94. 散歩コース
95. 散歩コース
96. 散歩コース
97. 散歩コース
98. 散歩コース
99. 散歩コース
100. 散歩コース

場所の特性が反映された多様な行動の中に世代間の関係が見られるような3Gネットワークを構築する。

CONCEPT



核家族と拡大家族のイトコドリ



アシカガ3Gネットワーク

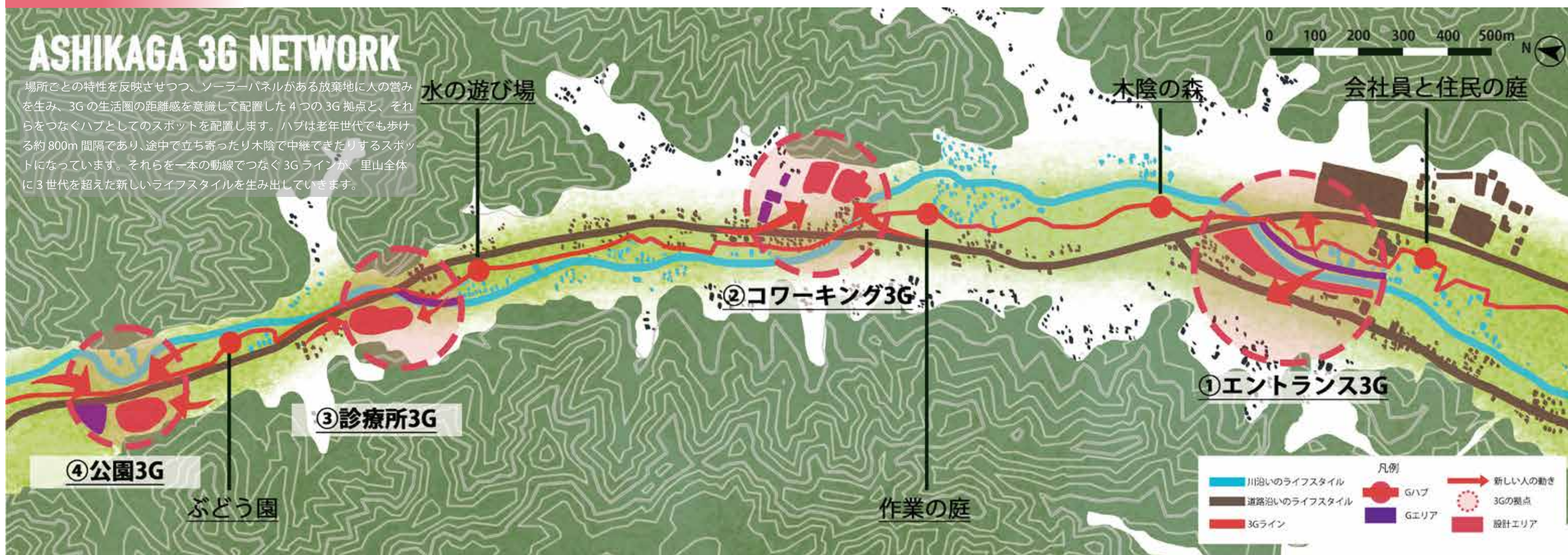
まちと里の柔軟な移住スタイル



里山と市街地間での多様な関わり方



Master Plan



④公園 3G 公園 × 空き家



③診療所 3G 診療所 × 親水公園 × 住宅・農地



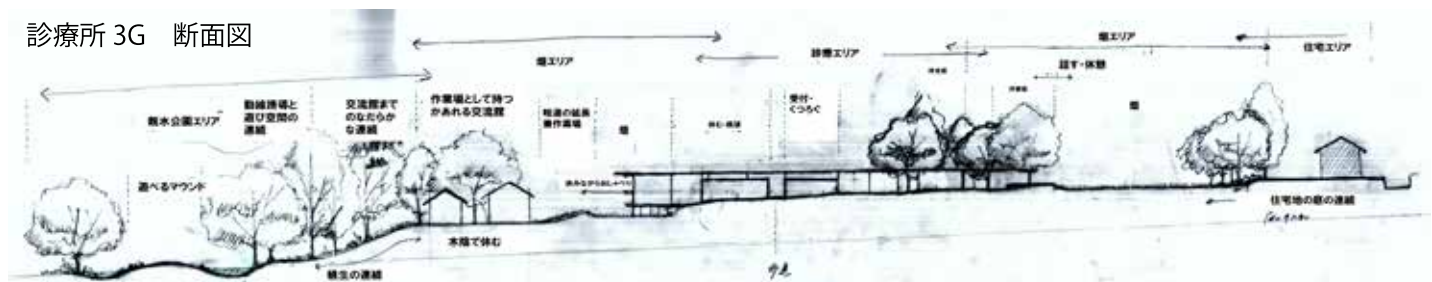
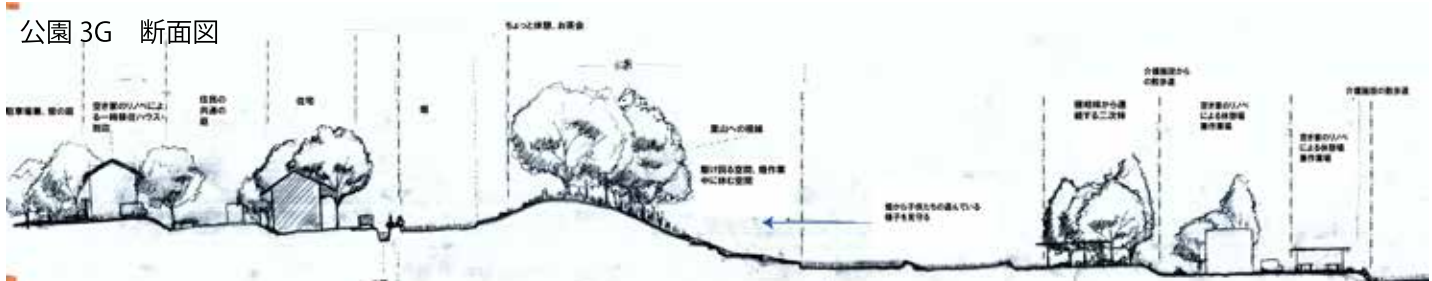
②コワーキング 3G コワーキング × 小学校・公民館



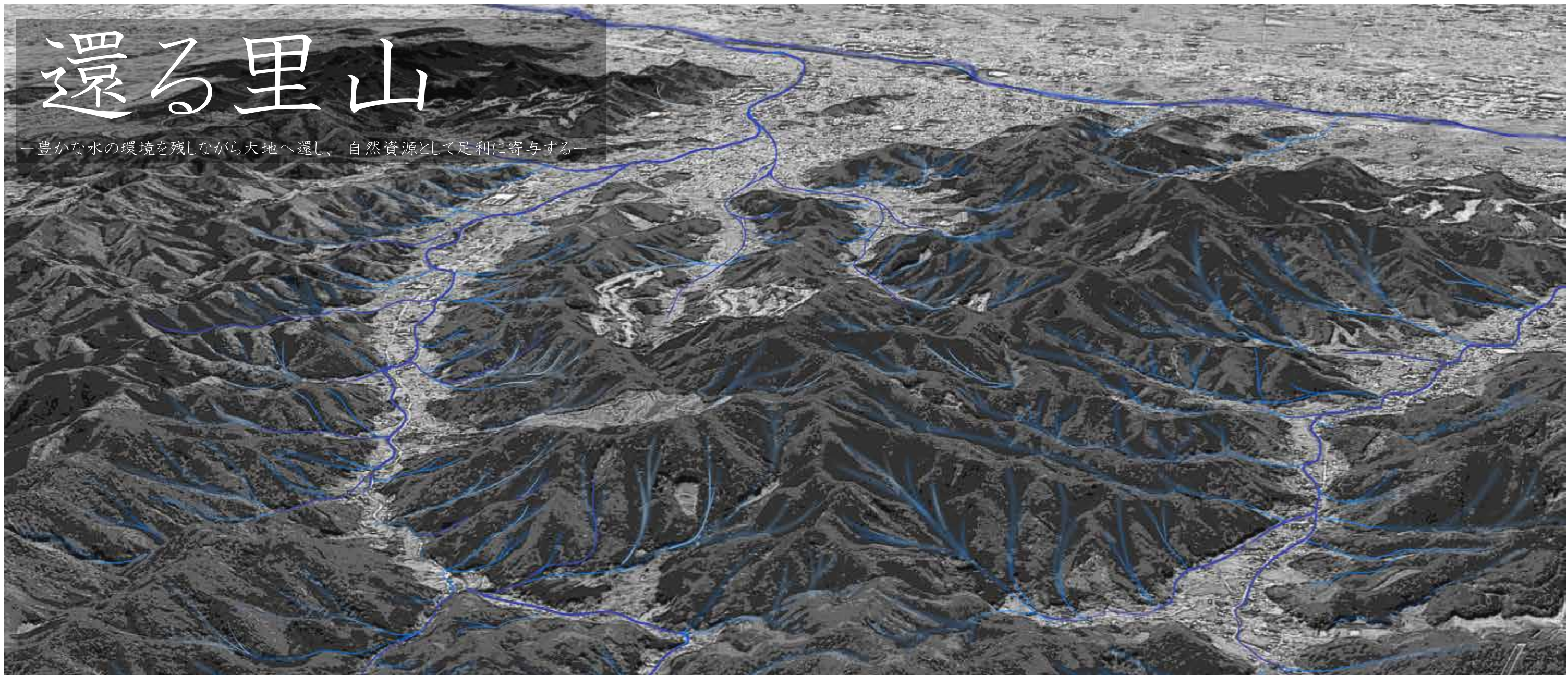
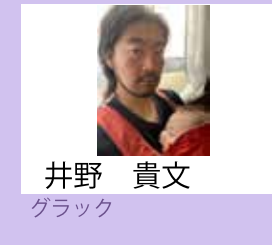
①エントランス 3G 視点場 × モビリティハブ



Site Plan



概要
A team
B team
C team
D team
E team
F team
ゲスト講師
活動記録
協賛企業



還る里山

—豊かな水の環境を残しながら大地へ還し、自然資源として足利に寄与する—

- 概要
- A team
- B team
- C team
- D team
- E team
- F team
- ゲスト講師
- 活動記録
- 協賛企業

■コンセプト：里山を豊かな水の環境を残しながら大地へ還し、自然資源として足利に寄与する

現地調査で訪れた際、広がる農地や通う水路、山奥から湧き出る新鮮な水や木漏れ日のさす涼しげな山川、山の中に佇むダム等、水によって育まれた美しい風景を見た。一方で、地域では人口減少、少子高齢化が進行し、それに付随する耕作放棄地の増加、ソーラーパネルによる景観破壊など多くの問題を抱えている事が調査で明らかになった。

かつて多くの人の生活を支えた里山は今、将来への分岐点に立っていると考えられる。そこで私たちは未来の里山のあり方を提案する。本提案では、里山と豊かな水資源を活用し時間をかけて大地に還し、足利市に自然資源として還元することを目指す。

里山の過去と未来



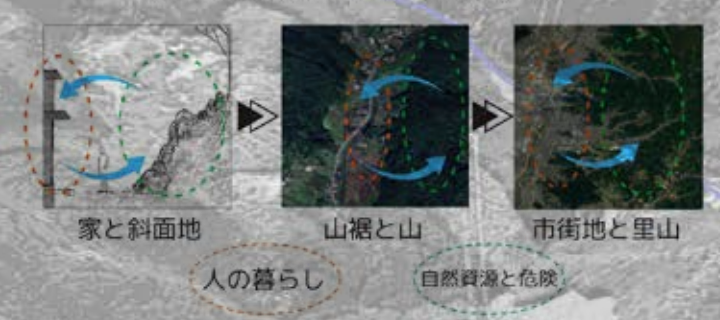
デザインダイアグラム



■山裾と人々の暮らし

調査で訪れた巖華園の庭園で急斜面の法面に施された石組みを見学した。そこで、岩組みが防災面、景観面において生活する人へ大きな影響を与えていることが分かった。調査を通じ、巖華園における「家」と「斜面」の関係は、名草地区における「裾」と「山」、足利市における「街」と「里」の関係とリンクしていると捉えた。

法面と家の関係→里山と市街地の関係



■現地調査：水とともにある足利

F班は現地調査で足利市を訪れた際、様々な風景に出会った。視界いっぱいに広がる田んぼと山々、生活を支える水路を流れる水の音、ひんやりとした湧き水、涼し気な小川、山の中で暮らしを守る砂防ダム、多様な生き物の生息地となる自然。どれも都会にはない素敵な風景であった。足利市のこれらの風景は水によって作られている。

調査経路



A：広がる田んぼ



B：暮らしに通う水の音



C：ひんやりとした湧き水



D：涼し気な小川



F：暮らしを守るダム



F：生き物の住みか



■現地調査：足利に残る庭園から学ぶ山裾の暮らし

川と足利の人々の関係に注目する中で市内の榊崎寺跡浄土庭園、巖華園庭園を調査した。浄土庭園では石垣の近くに池を作ることで雨天時石垣から流れる水の受け皿として防災機能を持たせていた。巖華園では鑑賞物としてだけでなく、土留めの役割としても石組が整備されていた。

榊崎寺跡浄土庭園

チャートを用いた洲浜状の護岸鑑賞用だけでなく、防災用としての庭園の池

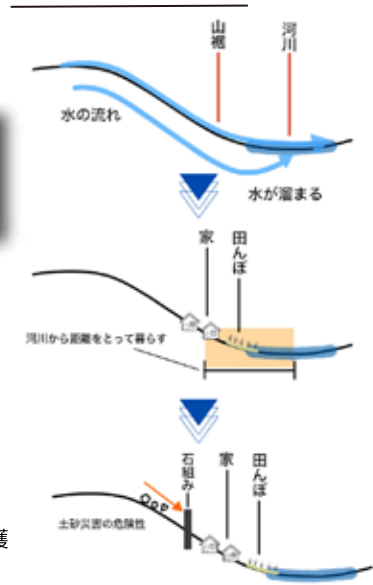


巖華園



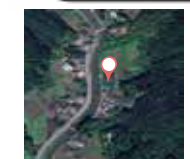
家屋と斜面の距離が近いため、災害時に脅威となる美観とともに、法面保護として石組が整備されている

山裾の暮らし



■現地調査：農家の方のお話

今のままでは里山の農業を維持するのは難しいね。



動物が多すぎて、まるで動物園だね

獣外の増加で商品化できない

樹木の生長で日陰が増え生産性の低下

少子高齢化による後継者不足

農地バンクなどの対策はとられているが効果は薄い

このままでは、ゆくゆく里山から農業はなくなってしまうのではないかな？

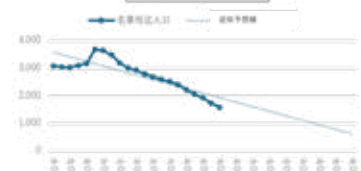
■現地調査：人口動態

名草地区年齢別人口



名草地区の年齢別人口：65才以上が40%を占める

名草地区人口



名草地区の人口：2080年には、1,000人を下回る予想

■都市計画における里山の位置



下水道の整備が市街化区域のみになっており、市街地中心でまちづくりが進められている

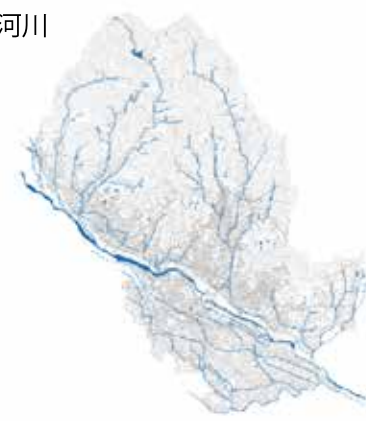
■文献調査：川で発展した足利

足利市の理解を深めるために対象地の江戸時代の地図、足利氏の文化歴史について文献調査を行った。足利市の文化川沿いには神社があり、日常の中で豊かな川の恵に感謝しつつ暮らしてきたこと、友禅流といった文化があるように染物を洗う場所として川が使われていたこと、江戸へ人や織り物等を運ぶ大動脈として機能していたり、足利は川と共に発展してきたことがわかった。今も寺社仏閣や庭園、地割などに名残が見える。

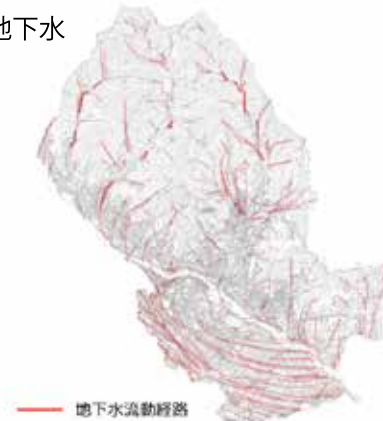


■文献調査：豊かな水資源

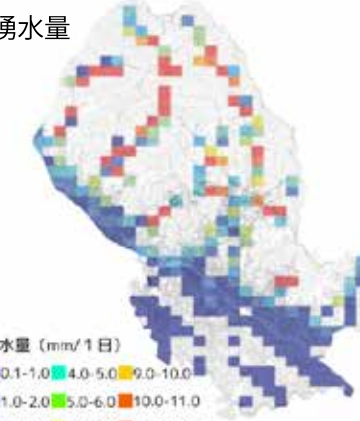
河川



地下水



湧水量



足利市は多くの水源を持ち、多くの川が網目のように張り巡らされている。地形が起伏に富み、沢や谷が多く存在する。

足利市は豊富な地下水を有し、水道の水源を全て地下水で賄っている。特に里山地域の山裾には多くの地下水が存在する。

足利市は多くの湧水を有します。特に山間部に多く湧水が分布している。水質が良好な地下水は昔から生活に使われてきた。

■デザイン対象地の検討：調査 × 体験

分析を重ねることで見える対象地



- 水関係レイヤー
 - 湧水量
 - 地下水流動経路
 - 河川
 - 井戸
 - 寺社仏閣
 - 田畑
- 生活関係レイヤー

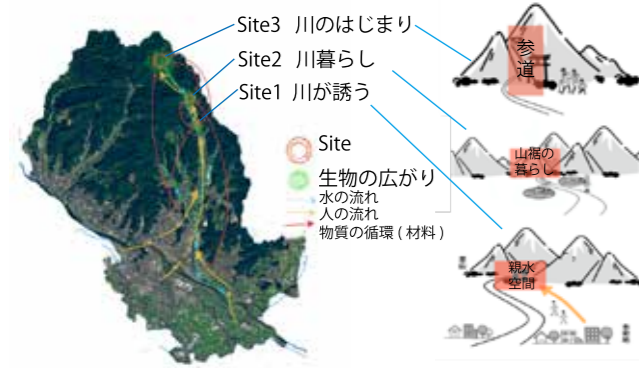
- 山裾と河川沿いに要素（分析対象）が集中
- 水が豊かなところに人の営みが集中

現地調査で見て感じた体験と感動

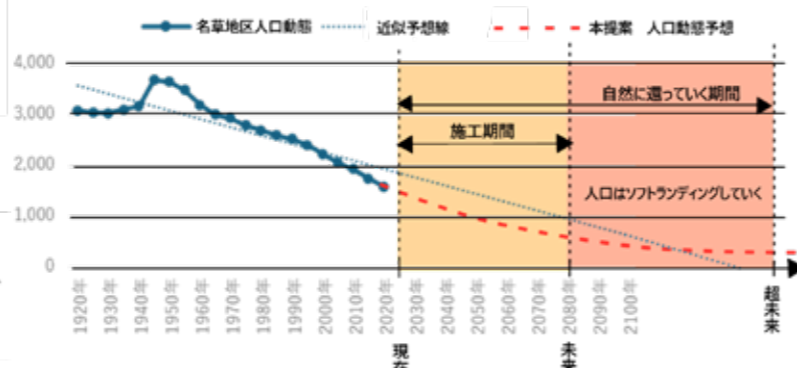


■マスタープラン

三つの対象地と循環する資源と自然



提案の時間軸



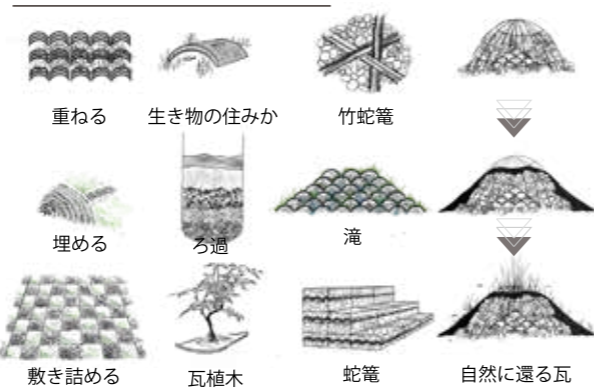
暮らしが街へと移り、里山の風景が失われつつある今、里山を人々との暮らしと共にある川を通じて、時間をかけ大地へと還し足利市、そして日本に自然資源として里山が還元する。三つの対象地で「川が誘う」、「川暮らし」、「川のはじまり」をコンセプトに「未来」と「超未来」をデザインする。

■デザインコード



素材として石・瓦・木・竹・苔など現地で取れ、大地に還せるような物を用いること、山、山裾、河原そして水中を多孔質な構造でシームレスに繋いで行くこと、多様な水の表情を作ることの3つを軸にデザイン。

自然物を用いた様々な手法



■Site 1：川を誘う

コンセプト

人や動植物が水に誘われるようにして集まる場所を創出する。有機的な形の蛇籠や石積みを用い、川の流れに入りこむように配置する。数十年後、植物が繁茂し、土や砂が堆積して微地形ができていくことで池、水生植物、動物等生き物が集まる空間となる。

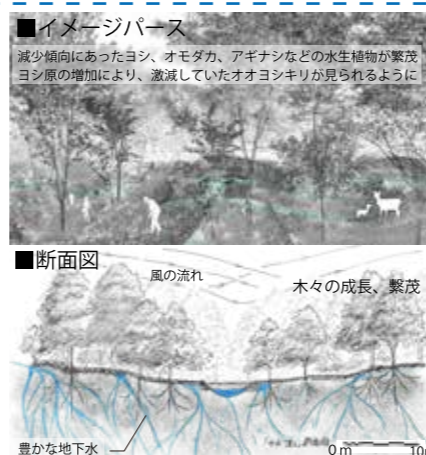
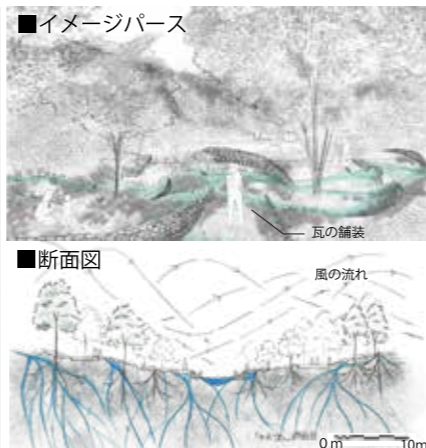
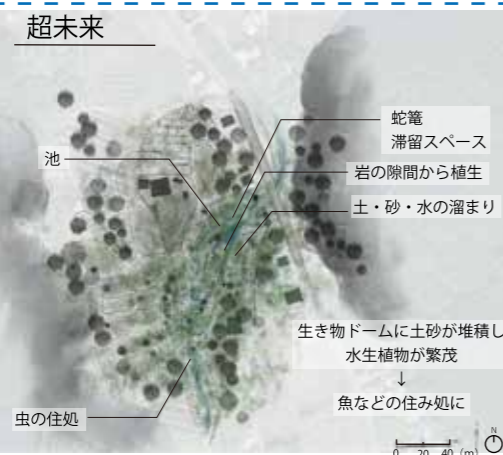
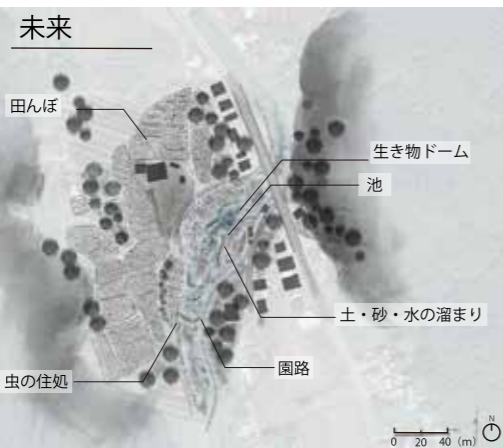
現況



斜面が緩やかであり、人が川に近づきやすく、植物の繁茂と硬い護岸、堆積した砂が目立つ。

山裾タイポロジー

A-A' 緩やかな斜面の山裾



■Site 2：川暮らし

コンセプト

豊富な水資源を利用し人が生活する場所を創出する。地形操作で山の谷と尾根を強調し、暮らしの中に水を引き込む。また竹林や石を使い宅地の斜面、川との間を大小様々な傾斜で繋ぐ。

石積みや竹蛇籠による雨水の浸透により豊かな地下水が生まれ長い時間の中で植生が変化し、岩の隙間に植物が生え繁茂する。

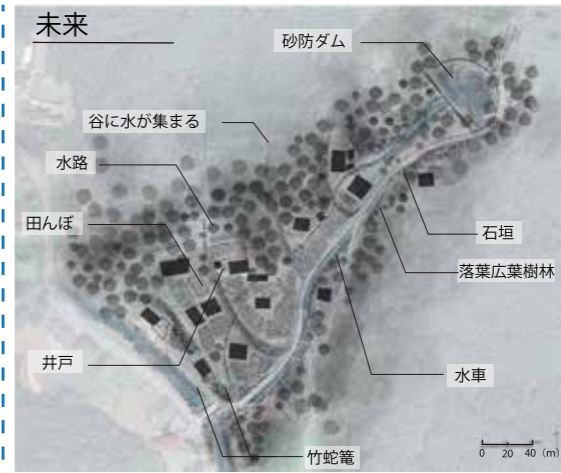
現況



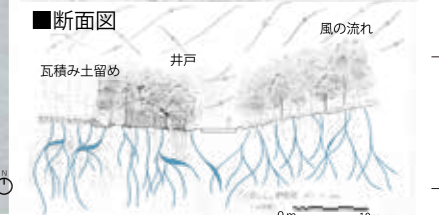
宅地から2m程の深さに水が流れ、擁壁や繁茂する植物に川が隔され、農地がありつつも川と暮らしの結びつきが見えづらい場所。また名草川近くの急斜面には荒廃竹林や砂防ダムがあり、地下水が多く通う。

山裾タイポロジー

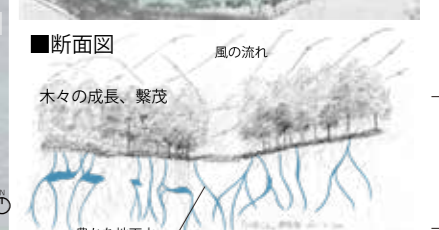
A-A' 山×山 B-B' 住宅×山 C-C' 住宅×住宅



■イメージパース



■イメージパース



■Site 3：川のはじまり

コンセプト

里山へ感謝する場として、土砂災害の跡地に樹木の祭壇を造る。瓦や竹、石を用い、訪れる人が山、川、暮らしのつながりを感じられる空間へ。舞台から見下ろす水の流れの先には、人々が植えた樹木が森となり、やがて祭壇と一体化する。斜面の強度を高めながら豊かな自然環境を育てていく。

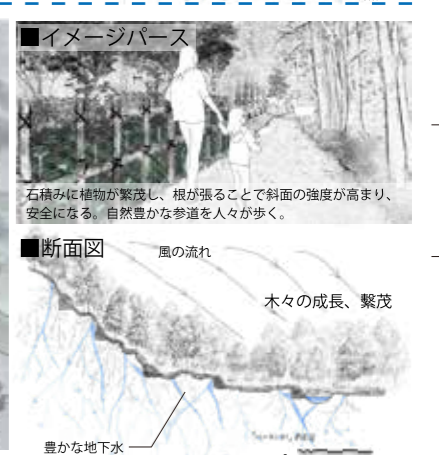
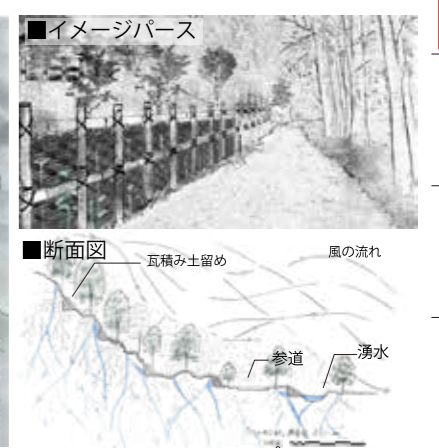
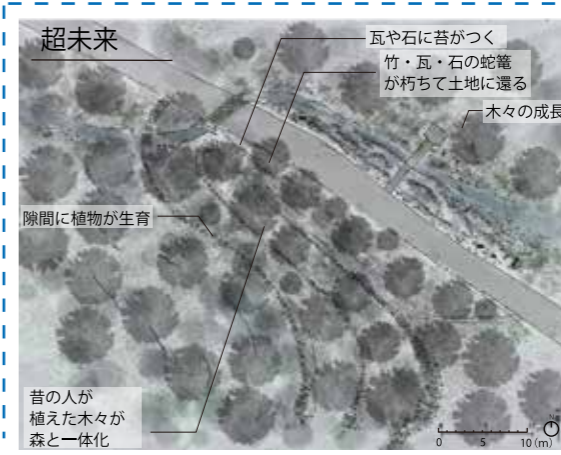
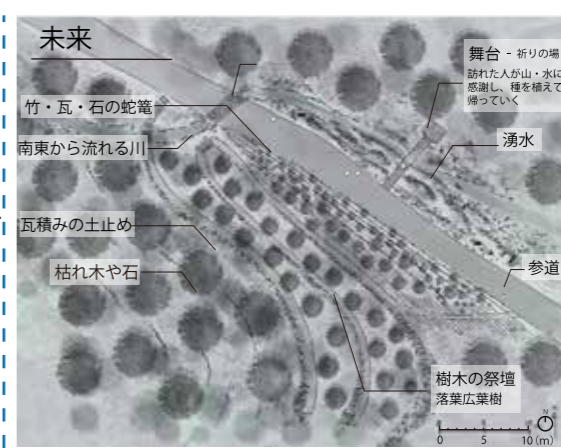
現況



小規模な土砂災害があった厳島神社の参道であり、スギ ヒノキ林に囲まれた場所。北西からは山から湧く水が流れ、参道を歩いていると水が流れる音が聞こえてくる。

山裾タイポロジー

A-A' 比較的緩やか B-B' 岩と木道 C-C' 急斜面



ゲスト総評

足利市 生活環境部環境政策課

柏瀬 誠



経歴・プロフィール

高専（建築学科）を卒業後、電力会社で15年間インハウスエンジニアリングとして、電力施設の建物の設計・監理を経験した後、平成25年に地元の市役所へ転職し、市有施設の設計・監理(3年)、移住定住担当(7年)、映画等の撮影支援(1年)、環境政策課(1年)で勤務。

一級建築士の資格を持ち、空き家の活用、アートイベントの開催、里山活性化事業、各種イベントの開催など、地域おこし協力隊や移住者、市内外の事業者などのサポートを行うことで、様々なまちづくり事業に携わらせていただいています。

学生時代興味を持って取り組んだこと

建物が好きで設計をやりたくて入学しましたが、いつの間にか、構造や材料、環境などのさまざまな分野のことに目を向けることになり、阪神淡路大震災の後だったので、卒研は「小学校の通学路におけるコンクリートブロック塀の安全性評価」でした(笑)。結果的に、いろいろなことを実践したことで「建築ってほんと建物だけじゃないな」と気づけたことが、一番“今の自分”に生きてるのではと思っています。

SUMMER STUDIO の感想

この度は足利をsummerstudioのフィールドに選んでいただきありがとうございました。

短い期間にもかかわらず所見のメンバーとチームを組み、提案をまとめあげる参加学生の意識の高さ、ゲスト、チューター、事務局の皆さんの指導力・組織力などどれも非常にレベルの高いものでした。水路、中橋の架け替え、空間のスレ、共有地、3世代交流、自然循環と幅広く等、どのテーマも足利の課題を的確に捉え、まちと里山を関連付けて提案する内容で、ランドスケープってさまざまな課題を解決できる万能薬なのかも！とランドスケープの可能性について大変驚きました。そして、この期間、参加された皆さんが「足利の未来」について考えてくれたことが、私にとってとにかくうれしかったです。

A班、D班に対するコメント

A班「水に織られて、動き出す足利」

私の中の最近HOTなネタ「水路」がテーマということで、個人的にも提案を楽しみにしていました。水路は古来より稲作のために整備され、近代の足利を支えた織物産業とも関係が深い大変貴重な資源であるにもかかわらず、水害などの負の面が大きく、近年、影を潜めています。そんな水路を「町の資源」と捉えた提案は、とてもわくわくさせてくれました。ゲストの方々から「開水路にすることで水害との折り合いをどうつけるか?」「人々の暮らしが変わる中、これからの水路の役割は?」は、自分自身にも突き刺さるものでした。水路を生かしたまちづくりはまちなかで暮らす地域住民だけでなく、足利の顔である石畳の敷かれた国宝鑑阿寺、足利学校周辺のお濠、区画整理が進む北仲通りなどを訪れる人々に潤いをもたらすアイテムになる信じております。

D班「区画を紡ぎ、風景を編む。」

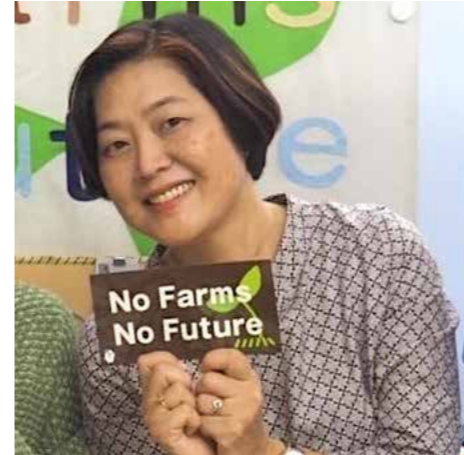
里山で6年地域活性に取り組んでいる集落支援員の後藤さんにインタビューを行い、町と里山のお互いが刺激あい、支えあうことができるのでは?という切り口でまとめられた提案で、宇都宮大学の西山教授が提唱されている「都鄙共存圏」という考え方ににつながるものでした。まちなかで暮らす・活動する人たちが、自然豊かな里山に胸を預けてのびのびと活用することに、とても可能性を感じました。ゲストの方々から「都市計画法や農地法の壁」など指摘をありましたが、これまでの法の概念を覆していかなければ里山もまちなかも生き残っていけないのではないのでしょうか?皆さんが合宿を終えた後、里山でアシカガアートクロスが開催されましたが、里山で見るアートは来場者に刺激と感動を与えてくれました。ぜひ田んぼの中の舞台上で演劇を見てみたいで

学生に対するメッセージ

初めての足利はいかがでしたか?初めて会うメンバーと、足利の現状、課題、打開方法について、必死に意見をぶつけ合い、まだ見ぬ未来を考え、提案をまとめた経験はきっと生涯の財産になると思います。10年後それぞれの世界で活躍されている皆さんにとって、足利が第二の故郷ようになってくれたら幸いです。今回の皆さんからの提案は、どれもさまざまな気付きを与えてくれました。10年後、足利のまちづくりがどのように変化しているか?楽しみにしていただき、ぜひ、また足利にお越しください。その時を心待ちにしております

宇都宮大学農学部・教授

西山 未真



経歴・プロフィール

大学院修了後、日本学術振興会特別研究員(PD)を経て大学に就職しました。最初の職場千葉大学園芸学部は都心と郊外の接点に立地していたこともあり、経済発展と生産と生活・消費の関係の変化について研究を行っていました。生産と生活の場が混在した都市化の矛盾を目の当たりにしたことで、社会や人間生活における農業の役割や価値について、中山間地にフィールドを広げ研究を行いました。中山間地では、くらすことそのものが農の価値を高める行為につながっていることが大変興味深く、農的資源やそこにくらす人々の過去労働の蓄積から多くのことを学びました。その後宇都宮大学に異動し、自らも農村地域に移住し、半農半研究者を実践しています。地域の空き家を学生たちと改修し山ラボを開設し、そこを拠点にアクションリサーチを実践しています。

学生時代興味を持って取り組んだこと

PD時代には、念願だった東南アジア農村でのフィールドワークを経験しました。大学に就職後、まもなく文科省の在外研究員として1年間、アメリカのウィスコンシン州で研究する機会を得ました。日本をくまなく歩いた学生時代、アジアから日本を逆照射したPDの時代、研究の最前線 新しいテーマに出合ったアメリカ時代、この3つの異なった地域での経験が私の研究視角、価値のスタンダードを形作ったと思っています。

SUMMER STUDIO の感想

若い学生のみなさんのエネルギーに刺激を受け、現役世代が本気をだす。学生、チューター、事務局、コメントを担う専門家が、それぞれの持ち味をぶつけ合う。世代と分野、役割を超えて、参加者が真剣に向き合う場が、ランドスケープの枠組みをも超えて、研究と現場実践の新しい関係をつくっていく。こうした貴重な機会は、再現しようと思ってもできるものではなく、まさに一期一会で成り立つ関係です。議論の中身も、その場の雰囲気から作り出されたもので、そんなとても充実した貴重な場と時間を共有させていただいて、感謝しています。

先輩方が作ってこられたランドスケープ分野の貴重な風土にいたく感心しました。

C班、E班に対するコメント

C班「ズレの中で暮らす」

土地利用の変遷から、足利の特徴「ズレの発見」には大変驚かされました。ズレというのはどちらかというと、違和感だったり、落ち着きの悪さだったり、ネガティブな印象を持ちますが、それに注目し、活かし、強調させることで、新しいまちの姿を描こうという意欲的な提案だったと思います。さらにそれを、里山と市街地、都心の関係変化にまで拡張し展望する野心的な取り組みに好感を持ちました。それを可能とするのも、市街地にある空き地という街の変化がもたらす空間だったりするところも興味深かったです。ズレの本質は何か?そもそもズレは埋めなくていいのか?など、次々問いが生まれるのですが、ズレを極めることで、どのように田園回帰が起こるのか?このプランの続きを、ライフワークのテーマとして持ちつづけてもらいたいです。

E班「アシカガ3Gネットワーク」

全体的にとてもバランスよくまとまっている提案でした。市街地と里山エリアの特徴を世帯構成で表現し、市街地と里山エリアの分断をジェネレーションの分断と重ねているところも興味深いです。異なる地域間の交流・循環を、血縁を超えた3世代ネットワークで実現しようとしているところも魅力的で、地域を総体的に捉える視点が伺えて、非常に説得力がありました。“ジェネレーションハブ”が800メートルおきに設置されるというのにも、現実味がありました。都市一極集中に硬直化したストレスフルな社会のアンチテーゼとして、世帯のライフステージに応じて、軽やかに居住地(スペース)を変えられる未来を提示していて、モビリティを高くして、市街地と里山を循環できるライフスタイルが実現することを期待したいです。

学生に対するメッセージ

このSSに参加した皆さんは、かけがえのない2つのものを手にしたと思います。一つは、仲間。2週間、同じ目標に向かって苦楽を共にし、成果を分かち合った仲間は、一生の宝です。もう一つは、自分のスタンダードとなる基準を持たせたこと。これからももの見方や考え方は変わっていくと思いますが、今回得られた物差しは、間違いなく自分の最初のスタンダードです。それを相対化していくことで、視野や価値観を広げていってほしいです。

ゲスト総評

アトリエT-Plus建築・地域計画工房代表
辻 喜彦



経歴・プロフィール

大学で建築を学び、卒業後にアトリエ系都市計画事務所に入社。以降、全国の歴史的町並み環境の保全と利便性の高い居住環境とが共生するまちづくりの計画～設計デザイン等に数多く携わってきました(1982年～)。約10年の修行の後、まちづくりは独りで出来るモノではなく、地域の専門家や一般市民と共に“チーム”で取り組むべきであることを確信し、以降、“市民・行政・専門家・事業者の連携によるまちづくり”プロジェクトのマネジメントに軸足を置き、全国各地のプロジェクト支援に参画しています。2010年に独立し、現在の建築・地域計画工房を主宰しつつ、大学の特別講師、一般社団法人、まちづくり会社の社外取締役等を兼務しています。

学生時代興味を持って取り組んだこと

学部3年生から始まった「設計演習」の毎回の課題に夢中になって取り組んでいました。4年生の夏にある出会いからニューヨークに1ヶ月滞在し、手づくりコンサート開催を手伝う機会があり、“まちなか広場”の存在やそこに集う人々と触れ合うというカルチャーショックを受け、それまでの単体デザインからもっと広い世界や環境の中で“建築”を捉えるようになり、卒業後に進んだ都市計画の世界に繋がった気がしています。

明治大学准教授
川島範久建築設計事務所代表
川島 範久



経歴・プロフィール

1982年生まれ。2005年東京大学工学部建築学科卒業。07年同大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了後、日建設計勤務。12年UCバークレー客員研究員。16年東京大学大学院博士課程修了。東京工業大学助教などを経て、現在、明治大学准教授。株式会社川島範久建築設計事務所代表取締役。博士（工学）。

14年「NBF大崎ビル（旧ソニーシティ大崎）」にて日本建築学会賞（作品）、23年「環境シミュレーション建築デザイン実践ガイドブックー自然とつながる建築をめざして」にて日本建築学会著作賞、24年「GOOD CYCLE BUILDING 001 | 浅沼組名古屋支店改修PJ」にて日本建築学会作品選奨を受賞。

学生時代興味を持って取り組んだこと

学部時代は計画系、修士課程以降は環境系の研究室に所属し、研究を行いました。また、修士課程の際には「環境的視点から建築デザインを再考する」というテーマで友人たちと勉強会を立ち上げ、建築の領域を越えて、読書会やリサーチ、インタビュー等を行いました。学生時代からの分野横断的思考が、現在にも続いているように思います。

SUMMER STUDIO の感想

私個人として、社会人となって最初に計画～設計～デザイン監理まで携わらせてもらった“ばんな寺”大日大門通りの設計デザイン以来、ずっと大切にしてきた足利のまちが舞台となり、しかも2週間という短期間に専門の異なる学生がチームを組み、課題に取り組む姿を知って、その成果発表にも立ち会えることとなり、久しぶりにワクワクしました。今回、お声掛けいただき、また足利を再訪する機会をいただいたことに大変感謝しております。

そして、各々が実務を抱えつつも、学生たちの取り組みを縁の下で支えられてきた事務局やチューターの皆さんのご苦労は大変な事だったと思います。それら全ての歯車が噛み合った(実際の現場はそんな綺麗事ではないでしょうが・・・)とても素晴らしい取り組みであり、もっともっと外へ向けて発信すべきだと感じました。

A班、B班に対するコメント

A班「水に織られて、動き出す足利」

足利の都市構造の名残である条里制の道や水路の存在に着目し、その復元によって市街地と里山を回遊するネットワークを再構築するという着眼点は、実に興味深いテーマでした。“水の街”という新たな足利の魅力づくりに繋がる提案だと感じました。

もう少し時間があれば、古写真や古地図等を掘り起こし、現代のレイヤーと重ね合わせることで、かつて生活の場であった“水辺”と“暮らし”の関わり方や未来へ向けての活かし方が見えてくると更に面白い展開が出来たかもしれません。

但し、空間表現としては、復活した水辺とその際空間の活用イメージに留まってしまい、もっと“水辺”と“暮らし方”“住まい方”との有機的な関係性等が表されると更に良い提案が出来たのではないかと思います。

学生に対するメッセージ

今思えば2週間という時間は短いですが、その最中は出口を見つけるのに果てしない時間だったと思います。専門も在籍、年齢も異なる皆さんが一つのチームとして課題に取り組むことは大変だったと思います。これからの時代、担い手は皆さんの世代です。これから社会が直面する様々な課題に、業種や専門等の既存の枠組みを超えて、“総力戦”で臨んでいくことが求められる時代でもあります。

今回のかけがえのない“仲間”との取り組みが必ず、その壁を乗り越える原動力の一つになると思います。頑張ってください!

SUMMER STUDIO の感想

私は建築設計を生業・専門としていますが、建築を環境的な視点から考えようとすると、建築単体ではなく都市・地域スケールで様々なものとの連関の中で考えることになり、必然的に分野横断的な思考になります。特に、生態系について考えると、都市・地域に留まらず、地球スケールでの思考、あるいは微生物の視点からの思考も求められます。今回のサマースタジオもそのような分野横断的な思考を要求するもので、とても現代的であると同時になかなかの難題です。しかし、学生の皆さんは生き生きとそのような難題にタックルしており、感心しました。また、このスタジオを運営している方々およびチューター陣の親身さと真剣さにも驚きました。このような先輩と後輩の繋がりは貴重だと思いますので、継続・発展させていっていただけたらと思いました。

D班、F班に対するコメント

D班「区画を紡ぎ、風景を編む。」

里山の耕作放棄地や空き家を活用し、災害リスクを考慮しながら、市街地と里山の繋がりをつくるというコンセプトは素晴らしい、それに向けたリサーチも非常に充実していると思いました。しかし、最終的な計画提案を見ると、里山の耕作放棄地を都市的な視点で「空地」とだけ捉えてしまっているように見えてしまいました。里山の美しい風景を維持するためには、その背後にあった連関を取り戻すことがまず求められるはずで、農業従事者の高齢化が進む中で、市街地からの人の力を借りることができればそれも可能かもしれない。そのような活動をサポートする仕組みや拠点が必要なはずで、アートや舞台は皆が里山に興味を持つキッカケにはなっても、持続性に欠けるようにも思いました。しかし、ドローイングはとても美しく、魅力的でした。

学生に対するメッセージ

都市・建築・土木・造園・ランドスケープ…様々な分野がありますが、地球環境危機の時代である現在、すべての分野が共通の目標に向かっており、今回のサマースタジオのような分野横断的な協働がますます求められるようになっていくのだろうと改めて思いました。また、同時に、そのような中だからこそ、逆に自分の軸足となるものを見つけ、それを磨いていくことの重要性も高まっていくのではないかと思います。今後の皆さんの活躍に期待しております。

F班「還る里山」

足利の豊かな水環境を、その場で採れ、大地に還すことができる素材で、多孔質な構造をつくり、水を大地に還していけるようにすることで、生物の生息環境をつくり、災害対策とし、水質を保全し、景観を守っていくという方針には共感しました。また、家と斜面、裾と山、街と里の関係性が相似形であるという気づきも秀逸だと思いましたし、なにより土中環境までも含めて描いたドローイングが美しく、迫力がありません。ただ、里山を基本的には自然に還していくという方針の提案でしたが、この方法は、自然の力を最大限活かしながら、人間が自分たちの手で管理していけるところが特徴なので、人間がいなくなるというよりは、かつての里山での人間と環境の関係のようなものが新しい形でまた建ち現れてくる未来像が描けるのではないかと思います。いずれにしても、共感できる部分の多い提案でした。

ゲスト総評

バイオーム
藤木 庄五郎



経歴・プロフィール

2017年3月京都大学大学院博士号(農学)取得。在学中に衛星画像解析を用いた生物多様性の可視化技術を開発。ボルネオ島の熱帯ジャングルにて2年以上キャンプ生活をする中で、環境保全を事業化することを決意。博士号取得後、株式会社バイオームを設立、代表取締役就任。生物多様性の保全が人々の利益につながる社会を目指し、世界中の生物の情報をビッグデータ化する事業に取り組む。環境省「2030生物多様性枠組実現日本会議行動変容WG」専門委員。日本自然保護協会評議員。ISO/TC331（生物多様性）国内審議委員。MITテクノロジーレビュー「Innovators Under 35 Japan 2021」に選出。

学生時代興味を持って取り組んだこと

大学院では、森林生態学を専攻し、生物多様性保全の方法論の研究を行っていました。特に、生物多様性の定量化技術に関心があり、広域を一度に定量化できるポテンシャルを持つ衛星画像解析（リモートセンシング）に着目しました。ボルネオ島のマレーシア領、インドネシア領の各地を転々とし、野宿生活をしたり、村に住みこんだりしながら現場の生物調査に励みました。

竹中工務店
向山 雅之



経歴・プロフィール

東京都八王子市生まれ。小学生時代暗くなるまで遊んでいた近所の空き地・原っぱ・裏山が原風景です。1994年3月神戸大学大学院工学研究科環境計画学専攻修了、同年4月竹中工務店に入社。1995年1月、神戸深江にある新社員寮にて阪神淡路大震災を経験し、人と建築・まちの関係を深く考えるきっかけとなりました。

建築設計からランドスケープデザインに移行し、人と自然をつなぐデザインを思っています。キックオフミーティングで紹介した通り、卒業設計のテーマ「風、土、水、そして人…」を今でも探求し続けていることに気づきました。

受賞作品：神宮前一丁目民活再生プロジェクト（2011年日本造園学会賞・作品部門）

学生時代興味を持って取り組んだこと

大学では建築を学びました。集落や都市住宅の住まい方調査を通じ、周辺環境と建築配置や、人の暮らしと建築の関係を研究していました。建築単体ではなく、人の営みがつくridas風景に関心を持っています。学生時代に旅行した南イタリアの山岳集落やエーゲ海の集落の風景は今でも鮮明に覚えています。当時読んだ吉阪隆正さんの「不連続統一体」の思想が、現代の社会課題解決の糸口だと感じています。

SUMMER STUDIO の感想

まず今回のワークショップに関わらせていただいたこと、また、参加者の熱意と努力に心から感謝と敬意を表します。限られた時間の中で、多様な視点から独創的なアイデアを展開し、具体的な形にまで仕上げられた今回の経験は必ず今後生きるものだったと思います。審査を通じて、それぞれのチームが地域社会や環境への深い洞察を持ちながら、住民のニーズに寄り添ったプランを提案されていることが伝わってきました。それぞれの提案には、現実的な課題と向き合いながらも、そこに独自の価値を見出し、それを計画に反映する姿勢が感じられ、甲乙つけがたい素晴らしいものばかりでした。今後の都市や自然環境の景観デザインに対する皆さんのさらなるご活躍を楽しみにしています。本当にお疲れ様でした。

SUMMER STUDIO の感想

2015～2019年のサマスタの企画・運営担当に携わりました。その頃に比べると、アイデア・デザイン・プレゼンのレベルが格段に上がっていると感じています。人の暮らしや健康を支える環境全般について、学術と計画・設計実務者がタッグを組み、様々な分野やキャリアを積んだ人を招き、議論し、デザインを考えることができる場として、サマスタは貴重な存在です。これまでのチューターと参加学生の真剣なコミュニケーションの積み重ねにより、自身の想いを互いにぶつけ合い思いもよらないアウトプットを引き出せる体験の場となり、質の高いデザインスタジオの実現につながっていると感じています。参加学生が社会人となりチューターに参画する人材の循環により、活動が継続することを期待します。

B班、F班に対するコメント

B班「おかえりのまちへ」

足利市の風景や体験を通して「おかえり」という感覚をデザインに落とし込むという非常に感覚的かつ情緒豊かな提案が印象に残りました。特に、視覚に限らず五感を通じて「おかえり」を感じるという視点は、実際の住民の経験や思い出に寄り添ったデザインアプローチであり、強い独自性を感じました。また実際に現地に行つて五感による検証を行いそれを視覚化したことで、感性を理論に落とし込むことに成功したように思います。中橋広場や中橋商店街のデザインでは、緩やかなスロープや広場の設計、自然素材の利用など、地域の風景や文化に調和する空間提案が「おかえり」という感覚を強める重要な要素として機能している点が秀逸です。全体として、情緒的な帰属感を空間に具現化する素晴らしい提案だと感じました。

F班「還る里山」

足利市の豊かな水資源を軸にした持続可能なデザインへの深い考察が伝わってきました。全体にストーリーが骨太で、説得力を持つものになっており、それでいて具体的な施策まで手抜きなく表現されていた点が非常に優れていると感じました。里山や市街地とのつながりが薄れている現状への危機感に対して、自然素材を活用しながら持続可能な水環境を維持するという提案は、現代の環境課題とマッチし、少し過激ながらも、未来に向けて価値ある方向性を示してくれていたように思います。自然環境を活かしながら、足利の豊かな景観と資源を未来へと還元しようとするデザインは、地域社会の新たなあり方を示唆し、足利市に限らず広く適用可能なモデルになり得るものであり、社会全体の持続可能な発展に寄与するものであると感じました。

学生に対するメッセージ

今回のワークショップでは、限られた時間の中で自ら答えを探し、独自の提案として具体化する体験をされたのではないかと思います。どの提案も素晴らしいものばかりで、私の方が学ばせていただきました。正解のない課題に対し、自分で答えを見つけられることは生きていく上で非常に重要な能力の一つだと思います。これからも、現場をよく見て、五感を通じて本質を洞察し、試行回数を重ねて正解にじっくり寄る作業を繰り返すことが大切だと思います。この繰り返しが自分らしさや独自性になり、自分自身の助けになるはずです。

C班、E班に対するコメント

C班「ズレの中で暮らす」

市街地の構造を読み解き発見した「ズレ」を手掛かりに、人が活用できる「関わりしろ」の空間提案につなげることができたのが大きな成果だと理解しました。デザイン対象エリアの選定と個々のデザインは、サイトの特性を踏まえチームメンバーで議論を重ねて案をつくったと想像します。

市街地の人・里山の人・首都圏の人、各エリアを利用するのは誰か？各エリアを巡るお薦めのルートは？巡る体験を通じ、市街地のどのような魅力を再発見できるのか？各サイトの整備はどのようなステップで進められ、整備の途中でどのような体験ができるのか？興味が高まりました。また、市街地の東側に「ズレ」ている名草川・袋川の水系ネットワークに着目し、市街地と里山の新たな関係の発見ができたかもしれません。

E班「アシカガ3Gネットワーク」

対象エリアにおける調査から、明快なコンセプトを計画平面図に落とし込む手腕は秀逸です。多世代が混ざり合い、しなやかに変化し、社会包摂的な暮らしの場ができると感じました。

診療所と公園の断面図は、そこでどのような体験ができるか理解を助けます。計画平面図を見ると細やかな分析の言葉や矢印が記されており、この内容を絵にして提案の解像度を上げることで、この提案が持つ魅力の顕在化が可能で、主体と行為（誰が、どのように）を場所と紐づけ図面にプロットすることで、既存→3Gネットワークの変化による改善点を明示し、ネットワークを成立させる新しい移動手段の提案があるとより素晴らしいと考えます。質疑に対する明確な受け答えによって、提案したいことが徐々に明確になってきたことが印象的で、潜在力の高い提案です。

学生に対するメッセージ

サマスタに参画いただきありがとうございます。参画するという選択をしたこと自体が、志の高さを表していると思います。VUCAの時代と言われている現代の行動作法はOODAです。全てを計画通りに行くことは難しく、現場で状況を判断し柔軟に対応していくことが大切です。まずは、現場に飛び込むことで状況がわかります。たとえ上手くいかなくてもそこから学び、成功するまで挑戦すれば、失敗はないと言えます。「ねばならぬ」ではなく、仲間と共に「やりたい」と思う挑戦を繰り返すことで新しい時代をつくることができると考えています。

活動記録・チューターコメント

A team



打ち上げにて

発表の最終調整

ねこじゃらし?

柏瀬さんによる水路の話

東大で作業 沼る構想 迫る終電

現地調査で門前そばを食べる

コンセプトと空間の操作を何度も行き来して考える中で、対象地にふさわしい設計が少しずつ浮かび上がってくるものだと思っています。今回のWSがまちを見る目を養うきっかけになれば嬉しいです!

水路を着眼点にして足利の新風景の提案は面白く、メンバーの皆様は多分野の視点で議論できてチューターの私も新鮮でした。この経験を今後活動に活かしたいなと思います!

土地の脈絡と未来への展望を語れた計画だったと思います。世の中がまだ知らないことを発見し、まだ見ぬデザインに挑戦することがWSの醍醐味だと思います。みなさんに発見があったなら良かったです。

小野寺康都市設計事務所 松野祐太 株式会社日本設計 邢絲琦

plough 小林祐太

B team



足利市駅を降りて北へ行くと、中橋と渡良瀬川、足利市の町並みと遠くの山々が迎えてくれます。



足利市での現地調査の様子。昔の面影がある建物が点在する風景は、足利特有の面白さだと歩いて実感しました。



限られた時間の中で意見を出し合いまとめた初日。



最終日のプレゼン後。無事終わることができました。

現地に足を運んで見て・感じて、考えたことを、一人一人が悩みながらも自分の言葉で表現しようとしている姿が印象的でした。これからもぜひ自身からのアウトプットを磨いていってください。

フリーランス 富士榮 宏将

公共事業でまちの風景が大きく変わろうとしている現実と向き合い、自ら現地で感じたことを分析し提案に結び付けようとした実直さがとてもよかったです。今後のご活躍を楽しみにしています。

株式会社 上條・福島都市設計事務所 上林 就

風景が変わること、変わらないことを読み込んで提案できたと思います。まち中での体験の積重ねによって橋からの風景も良くなるので、まちなかのデザインに時間をかけられたらもっとよかったですね。

plough 小林 裕太

活動記録・チューターコメント

C team



千葉大でのミーティングで「ズレ」を発見する。

合宿1日目は、カレー作り

セミナーハウスでの話し合い。

1日目の夜。中間発表に向けての追い込み開始

最終発表への追い込み開始

最終発表後の打ち上げ：みんなでCポーズ



講評者から“奥性”のキーワードを引き出したように、隠れていた街のポテンシャルをあぶり出す提案になったのでは！今回の経験を糧に、皆さんのさらなる活躍を期待しています。

株式会社 プレイスメディア 岸孝



それぞれの長所短所を理解し合い議論を重ねて取り組めていたチームでした。共同作業の難しさと楽しさを存分に体験できたチームだったと思います。今後も理想の風景を描き続けてください。

株式会社 スタジオ ゲンクマガイ 中村寛



ズレという特徴を発見、追求し続けた濃い2週間でしたね。みんなで議論し作品を仕上げた経験は今後にきっと生きてきます。そうした時間を一緒にできて私もかなり刺激をもらいました！

株式会社 竹中工務店 川添浩輝



全員が常に前向きに意見を出し合い進めていく姿に自分もこうやって仕事したいなと、元気をもらいました。結果は嬉しくも悔しい結果でしたが、お互い次の機会にはさらに素敵な提案をしましょう！

株式会社 三菱地所設計 渡部美香

D team



チーズ！

皆でアイデアを出し合う

発表しているD班



里山支援員の方へのヒアリング調査

発表後に全員で活動を振り返る



現地で得た発見やヒアリング等の調査結果にしっかり向き合えたチームでした。デザインにもっと時間が取れると良かったですね。夢のある議論ができて楽しかったです。お疲れ様でした。

ランドスケープ・プラス 坂本幹生



現地の人に直接話を聞いて意見も貰えた貴重な機会だったと思います。プレゼンで伝えきれない部分があって悔しさも残っていますが、場数を踏んで今後には是非活かしてください！お疲れ様でした！

フリーランス 吉井信人



里山と市民を結びつける可能性のある提案。想像される人の活動が実に多種多様なため、スケッチや2Dでは伝えきれなかった印象。一つのモデルとして、皆さんの中で今後も追求してほしい提案です。

プレイスメディア 岸孝

活動記録・チューターコメント

E team



現地調査 1



現地調査 2



チューター事務所でのクリティーク



最終講評を終えて



最終講評前日の追い込み



チューターミーティング



足利合宿



着想、マスタープラン、サイトプランが魅力的でした。そこに住んでみたいと思わせる提案に繋がったように思えます。優秀賞おめでとうございます。

株式会社 グラック 井野 貴文



コアワーキング期間の最終日に、チーム全員で机を囲んで図面を描けたのは、デザインワークショップならではの活動ができたからこそだと思います。その手書き図面が評価されたことは、非常に良かったです。

株式会社 プレイスメディア 入江 貴道



2週間という短い期間でしたが、よく悩みよく手を動かした経験がみなさんの糧になることを願っています。ワークショップを通じてできた繋がりを大切に、この先も邁進してもらえると嬉しいです。

オンサイト計画設計事務所 本田 亮吾

F team



現地調査の中で見つけた設計対象地からの景色



現地の湧水はひんやり気持ちよかった～



現地の図書館にて資料調査



展望台にて、里から街を



プレゼン用に水採取 現地のカフェでランチタイム



最終発表後のワンショット。「お疲れ様でした！」



的確な情報共有・厳密な言語化・魅力的なビジュアル化・想像力を喚起するストーリーづくりは、今後他者と関わりながら生きていく上であなたのことを助ける武器となります。磨き続けてください。

日建設計 須藤 伸孝



現地で土地にかじりつくようにリサーチを重ねていた所が印象的でした。ネットでのリサーチやチームビルディングも重要ですが、自身の身体から自由に発想する過程を引き続き実践してもらえたらと思います！

toge toge 塚本 安優実



生き物や物質のミクロなレベルまで提案を深く掘り下げようとした姿勢に好感を持ってました。最優秀チームとして胸を張って下さい。おめでとうございます。

グラック 井野 貴文

Summer Studio 2024 ご協賛企業



大成建設 株式会社
photo: ひろしまゲートパーク



株式会社 戸田芳樹風景計画
photo: ロジスクエアふじみ野

概要

A team

B team

C team

D team

E team

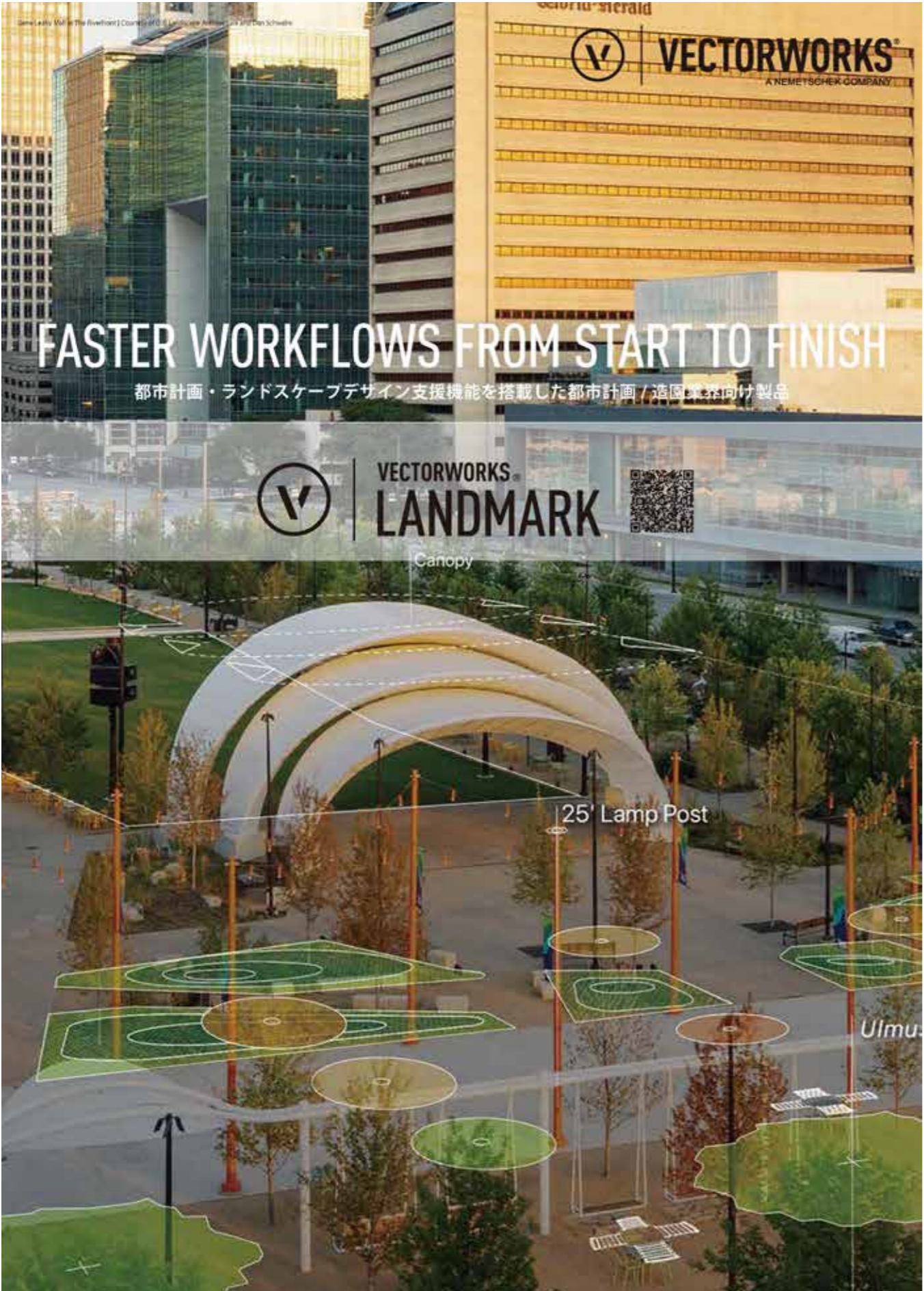
F team

ゲスト講師

活動記録

協賛企業

Summer Studio 2024 ご協賛企業



ベクターワークスジャパン 株式会社



株式会社 あい造園設計事務所
photo: しながわ区民公園南側ゾーン



株式会社 オットー・デザイン
photo: イオンモール上尾 / AGEO PARK

概要

A team

B team

C team

D team

E team

F team

ゲスト講師

活動記録

協賛企業

Summer Studio 2024 ご協賛企業



オンサイト計画設計事務所
photo: 盛岡市動物公園 ZOOMO
撮影: 吉田誠



株式会社 スタジオ・ゲンクマガイ
photo: 西新宿五丁目北地区防災街区整備事業



株式会社 グラック
photo: 川口市立グリーンセンター



高野ランドスケーププランニング 株式会社
photo: 恵庭 花の拠点 はなふる

- 概要
- A team
- B team
- C team
- D team
- E team
- F team
- ゲスト講師
- 活動記録
- 協賛企業

Summer Studio 2024 ご協賛企業



株式会社 日建設計
 photo: グラングリーン大阪 うめきた公園
 撮影 : Akira Ito.aifoto



株式会社 プレイスメディア
 photo : INSPIRATION TRAIL



株式会社 日本設計
 photo : 虎ノ門ヒルズ森タワー



株式会社 ランドスケープ・プラス
 photo : 馬場川通りアーバンデザインプロジェクト

- 概要
- A team
- B team
- C team
- D team
- E team
- F team
- ゲスト講師
- 活動記録
- 協賛企業

Summer Studio 2024 ご協賛企業



株式会社 上條・福島都市設計事務所
photo: 脇川かわまちづくり 「しろしたのかわみなと」



株式会社 キタバ・ランドスケープ
photo: ノーザンホースパーク "ディーブインパクトゲート"
(彫刻: 安田侃、監修: アトリエブク)



株式会社 ランドスケープデザイン
photo: パークタワー勝どきミッド/サウス
撮影: 解良信介 / URBAN ARTS



栗原正峰 (書道アーティスト)
photo: 涙とホクロ



田口真弘 (グリーン・ワイズ社)
photo: SANU 那須 1st
撮影: SANU



Photo by Yuichi HIGURASHI + TERRAIN architects
株式会社 ヒュマス
photo: かしまだ保育園



株式会社 三菱地所設計
photo: MUFG PARK

概要

A team

B team

C team

D team

E team

F team

ゲスト講師

活動記録

協賛企業

Summer Studio 2024 ご協賛企業



IFLA-APR2023日本大会を
サポートして頂いた皆様へ



Living with
Disasters
IFLA Asia-Pacific
Regional Congress
2023 TOKYO, JAPAN

2023年11月に開催したIFLA-APR 2023日本大会は、全日程を無事に終了いたしました。
都市と自然が共存する二子玉川において、ランドスケープの今日的課題をアジア太平洋地域のランド
スケープアーキテクトたちと話し合ったことは未来への礎となりました。現在と未来を俯瞰的に捉えた
基調講演、3つの目標の内容を深めた副会長らによるクロストーク、各国の取り組みを具体的に語った
セッション。まさに大きな視点から手が届く行動まで、私たちが活動すべき地平線が立体的に視覚化
されたシンポジウムでした。
さらに、世田谷区とランドスケープアーキテクト連盟が結んだ「共同宣言」は、両者にとって大きな
メモリアルとなり、大会のハイライトになりました。
運営を委託した会社からも「本業を持つメンバーが手弁当でこれだけの大会を開催し、一体感に満ちた
雰囲気は初めてです」と語ってくれました。
皆様のパワーは「ひとつの時代の始まり」を可能にしてくれたと確信しています。ガラでの皆さんの
踊りがそれを証明してくれていました。
本当にありがとうございました。

JLAU会長 戸田 芳樹

JLAU
Japan Landscape Architects Union
<https://jlau.or.jp>

一般社団法人 ランドスケープアーキテクト連盟

SUMMER STUDIO 2024 Report

□発行日
2025年1月10日 発行

□発行・編集
公益社団法人 日本造園学会 関東支部
第19回学生デザインワークショップ
SUMMER STUDIO 2024

担当事務局（関東支部運営委員）
岸 孝
井野 貴文
小林 祐太

まとめ本編集担当
渡部 美香
松野 祐太

□問い合わせ先
E-mail: ss.jila.kanto@gmail.com

概要
A team
B team
C team
D team
E team
F team
ゲスト講師
活動記録
協賛企業

SUMMER STUDIO 2024



発行

公益社団法人 日本造園学会関東支部 / 第19回デザインワークショップ サマースタジオ 2024